椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

—1—

福岡県京都郡豊津町所在
弓田遺跡・八ッ重遺跡の調査

1989

福岡県教育委員会

椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

—1—

福岡県京都郡豊津町所在
弓田遺跡・八ッ重遺跡の調査

序

この報告書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和61年度から実施している一般国道10号線椎田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

この度の報告は、京都郡豊津町所在の弓田遺跡及び八ッ重遺跡についてのもので、「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第１集として刊行することになりました。

本報告を通して地方文化の研究、教育資料等にご活用いただければ幸いに存じます。

発掘調査と本報告書の発刊については、豊津町教育委員会の全面的な協力がありましたことに深甚なる謝意を表します。

平成元年３月31日

福岡県教育委員会
教育長　竹井　宏

序

豊津町教育委員会は、昭和62年度に福岡県教育委員会の指導を得て以下に報告いたしますとおり、一般国道10号椎田バイパスのうち豊津町大字下原・呰見地区の埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

椎田バイパスは行橋および豊前バイパスと連続することにより、現在の国道10号の交通渋滞緩和に供するだけでなく、沿線の市町村にもたらす経済的効果ははかり知れないものがあり、早期の完成が強く望まれているところであります。

しかし、このために祖先の多くの歴史遺産が破壊されることになりました。本書はそれらの記録としては未だ不十分なものではありますが、埋蔵文化財に対する理解と保護ならびに地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査全般にわたり御高配を賜わった福岡県教育委員会ならびに発掘作業に御協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位には、心から感謝いたします。

平成元年３月31日

豊津町教育委員会

教育長　吉田無佐治

例　　言

1．本書は、昭和62年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて、一般国道10号椎田バイパスのために破壊される埋蔵文化財を事前に発掘調査した福岡県京都郡豊津町大字下原字弓田遺跡と同町大字呰見字八ッ重遺跡の報告書であり、一般国道10号椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第一冊目になる。

2．本書の執筆分担は第１章の１を柳田康雄が担当し、他については末永弥義が担当した。

3．発掘調査によって検出した遺構の記録および出土遺物は豊津町教育委員会において保管している。

4．遺構の実測図作成は末永と橋岡雄介が、写真撮影および本書の図面作成については末永がおこない、遺物の整理作業には川本寿子・中原祝子・中村千代子・井無田栄子が従事した。

5．本書の編集は、柳田の指導のもとに末永が担当した。

本 文 目 次

頁

第１章　調査の経過 …… 1

１．調査に至る経過 …… 1

２．弓田遺跡・八ッ重遺跡の調査経過 …… 3

第２章　遺跡の位置と環境 …… 7

１．遺跡の位置 …… 7

２．周辺の遺跡 …… 7

第３章　弓田遺跡・八ッ重遺跡の調査 …… 12

第１節　弓田遺跡の調査 …… 12

１．はじめに …… 12

２．弓田遺跡東区の調査 …… 12

(1)円形周溝状遺構 …… 12

(2)その他の遺構と遺物 …… 14

３．弓田遺跡西区の調査 …… 17

４．小結 …… 18

第２節　八ッ重遺跡の調査 …… 19

１．はじめに …… 19

２．八ッ重遺跡東区東側の調査 …… 19

(1)小谷 …… 19

(2)その他の遺構と遺物 …… 20

３．八ッ重遺跡東区西側の調査 …… 22

(1)住居跡 …… 22

(2)土壙 …… 26

(3)その他の遺構と遺物 …… 27

４．八ッ重遺跡西区東側の調査 …… 28

５．八ッ重遺跡西区西側の調査 …… 29

(1)井戸 …… 32

(2)その他の遺構と遺物 …… 34

６．小結 …… 34

図 版 目 次

図版１　(1)弓田遺跡東区全景（東より）
(2)弓田遺跡東区全景（西より）
図版２　(1)弓田遺跡東区１号円形周溝状遺構（東より）
(2)弓田遺跡東区１号円形周溝状遺構土層断面
図版３　(1)弓田遺跡東区１号円形周溝状遺構土器出土状況１
(2)弓田遺跡東区１号円形周溝状遺構土器出土状況２
図版４　(1)弓田遺跡東区１号溝（南より）
(2)弓田遺跡東区出土遺物１
図版５　(1)弓田遺跡東区出土遺物２
図版６　(1)弓田遺跡西区北半全景（東より）
(2)弓田遺跡西区北半全景（西より）
図版７　(1)弓田遺跡西区北半自然河川内堆積状況
(2)弓田遺跡西区南半全景（西より）
図版８　(1)八ッ重遺跡東区全景
(2)八ッ重遺跡東区東側全景
図版９　(1)八ッ重遺跡東区東側小谷・１号溝検出状況
(2)八ッ重遺跡東区東側小谷全景（西より）
図版10　(1)八ッ重遺跡東区東側出土遺物
図版11　(1)八ッ重遺跡東区西側全景
(2)八ッ重遺跡東区西側南半（東より）
図版12　(1)八ッ重遺跡東区西側柱穴群検出状況
(2)八ッ重遺跡東区西側１号～３号住居跡（東より）
図版13　(1)八ッ重遺跡東区西側１号住居跡
(2)八ッ重遺跡東区西側２号・３号住居跡
図版14　(1)八ッ重遺跡東区西側１号土壙
(2)八ッ重遺跡東区西側２号土壙
図版15　(1)八ッ重遺跡東区西側出土遺物
図版16　(1)八ッ重遺跡西区東側全景
(2)八ッ重遺跡西区東側全景（北より）
図版17　(1)八ッ重遺跡西区東側出土遺物

図版18　(1)八ッ重遺跡西区西側全景
(2)八ッ重遺跡西区西側１号井戸周辺（東より）
図版19　(1)八ッ重遺跡西区西側１号井戸内礫出土状況
(2)八ッ重遺跡西区西側１号井戸内板材出土状況
図版20　(1)八ッ重遺跡西区西側１号井戸完掘状況
(2)八ッ重遺跡西区西側１号井戸出土遺物１
図版21　(1)八ッ重遺跡西区西側１号井戸出土遺物２
(2)八ッ重遺跡西区西側出土遺物

挿　図　目　次

頁
第１図　弓田遺跡・八ッ重遺跡地区区分図(１／10,000) …… 4
第２図　周辺主要遺跡分布図(１／25,000) …… 8
第３図　弓田遺跡東区全体図(１／ 400) …… 13
第４図　弓田遺跡東区１号円形周溝状遺構実測図(１／40) …… 14
第５図　弓田遺跡東区１号円形周溝状遺構出土遺物実測図(１／３) …… 15
第６図　弓田遺跡東区出土遺物実測図(１／３・１／２) …… 16
第７図　弓田遺跡西区東壁面自然河川内土層概念図 …… 17
第８図　弓田遺跡西区全体図(１／ 400) …… 17
第９図　八ッ重遺跡東区東側全体図(１／ 400) …… 20
第10図　八ッ重遺跡東区東側出土遺物実測図(１／３・１／２) …… 21
第11図　八ッ重遺跡東区西側全体図(１／ 400) …… 22
第12図　八ッ重遺跡東区西側１号住居跡実測図(１／60) …… 23
第13図　八ッ重遺跡東区西側２号住居跡実測図(１／60) …… 24
第14図　八ッ重遺跡東区西側３号住居跡実測図(１／60) …… 25
第15図　八ッ重遺跡東区西側土壙実測図(１／20) …… 26
第16図　八ッ重遺跡東区西側出土遺物実測図(１／３) …… 27
第17図　八ッ重遺跡西区東側全体図(１／ 400) …… 28
第18図　八ッ重遺跡西区東側出土遺物実測図(１／３) …… 28
第19図　八ッ重遺跡西区西側全体図(１／ 400) …… 29
第20図　八ッ重遺跡西区西側１号井戸実測図１(１／30) …… 30
第21図　八ッ重遺跡西区西側１号井戸実測図２(１／30) …… 31
第22図　八ッ重遺跡西区西側１号井戸出土遺物実測図(１／３) …… 32

第23図　八ッ重遺跡西区西側出土遺物実測図（1 / 3）…… 33

表　目　次

頁
第1表　一般国道10号椎田バイパス第Ⅱb・c地点遺跡名対照表 …… 3
第2表　周辺主要遺跡一覧表 …… 10・11

第１章　調査の経過

１．調査に至る経過

一般国道10号は、北九州市を起点とし、東九州の主要都市を経て鹿児島市に至る延長約450kmの大動脈である。特に北九州市より大分市に至る区間は、今後一層の発展が予想される地域で、近年行橋市から豊前市にかけて、北九州市のベッドタウンとして脚光をあび、人口増加の著しい地域で国道の交通量は増加の一途をたどり、現在飽和状態に達している。

椎田バイパスは、こうした国道10号の交通混雑を解消し、地域の健全な発展に寄与するため、北大道路の一環として全延長約16.2km（建設省5.9km、日本道路公団10.3km）が計画された。

昭和54年12月22日事業許可申請が建設大臣あて行われ、昭和55年２月８日に事業許可なる。同年７月１日には、施工主体である日本道路公団の福岡建設局椎田バイパス工事事務所が設置された。さらに同年10月21日に建設省区間も含めて路線発表された。それによると、同事務所担当は京都郡豊津町大字徳永から築上郡椎田町大字上の河内までの延長約10.3kmで、各町別の内訳が豊津町約1.8km、築城町約3.6km、椎田町約4.9kmとなる。

福岡県教育委員会は、椎田バイパスの椎田町域の巾杭設置後の昭和60年４月から現地踏査による分布調査を実施した。この現地踏査には、当初は道路公団椎田工事事務所の関係者も同行された。道路公団が施工する豊津町・築城町・椎田町の区間には、古墳群と中世の山城が散在する地域であり、当時判明していた大きな古墳群である椎田町石堂古墳群などを配慮したルート設定であった。ところが、椎田町と築城町境に位置する広幡城跡は、地元による保存運動がおこり、文化課を含めた三者協議の結果、破壊を最低限度にとどめるよう設計変更することで決着した。しかし、椎田町域内の石堂古墳群も分布範囲が広いことが判明し、16基の古墳群が調査対象となった。

発掘調査は、用地買収が進行している椎田町域を昭和61年５月１日から開始し、昭和62年度に豊津町分、昭和63年度に築城町分も開始した。

福岡県教育委員会文化課の発掘調査事務所は、椎田バイパスを中心に、北が行橋バイパス、南が豊前バイパスと北大道路に関係する発掘調査が進行するため、その中心地となる椎田町に設置することになり、昭和61年５月に発足した。

発掘調査は、途中用地買収の遅れに阻まれながらも、公団関係者の協力とご配慮により順調に進行している。

本書には、これらの発掘調査のうち、豊津町所在の弓田遺跡と八ッ重遺跡を豊津町教育委員会に再委託し、その調査報告を収録した。昭和61～63年度の関係者は以下のとおりである。

調査関係者（昭和61年～63年度）

日本道路公団福岡建設局

局　　長	今村浩三（前任）	杉田美昭（前任）	臼井　信
総務部長	安元富次（前任）	進　哲美	
管理課長	森　宏之（前任）	福島紀昭	
管理課課員	延　哲昭（前任）	小野浩二（前任）	林崎修也

日本道路公団福岡建設局椎田バイパス工事事務所

所　　長	山田勝正（前任）	山田将博	
副所長（事）	溝口萩男（前任）	渕脇志水（前任）	佐藤健一郎
副所長（技）	西村　剞（前任）	坂牧嵩三（前任）	国本忠敬
庶務課課長	塩川正基（前任）	樫川敏博	
用地課課長	工藤有道（前任）	二神鉄男（前任）	益岡政夫
工務課課長	佐々木俊治		
工務課課員	坂梨嘉帝（前任）	宮成健司	
築城工事区工事長	坂牧嵩三（前任）	山口宗雄	
築城工事区工事区員	権藤清郷（前任）	松尾光次	
椎田工事区工事長	鰺坂佳晃（前任）	黒田義樹	
椎田工事区工事区員	下村勝敏（前任）	上川裕之	

福岡県教育委員会

総　　括			
教 育 長	友野　隆（前任）	竹井　宏	
教育次長	安倍　徹（前任）	大鶴英雄　渕上雄幸	
管理部長	大鶴英雄（前任）		
指導第２部長	大平岩男		
文化課課長	窪田康徳（前任）	葉石　勲	
〃　課長補佐	平　聖峰		
〃　課長技術補佐	宮小路賀宏		
庶　　務			
文化課庶務係長	平　聖峰（兼任）	加藤俊一（前任）	池原脩二
〃　　事務主査	竹内洋征（前任）	澤田俊夫	

調　　査　(昭和61年～62年度)

文化課参事補佐兼調査班総括　　柳田康雄

〃　技術主査　　副島邦弘

〃　主任技師　　馬田弘稔（前任、現北九州教育事務所技術主査）

〃　　〃　　小池史哲（現技術主査）

〃　技　　師　　緒方　泉（現主任技師）

2．弓田遺跡・八ッ重遺跡の調査経過

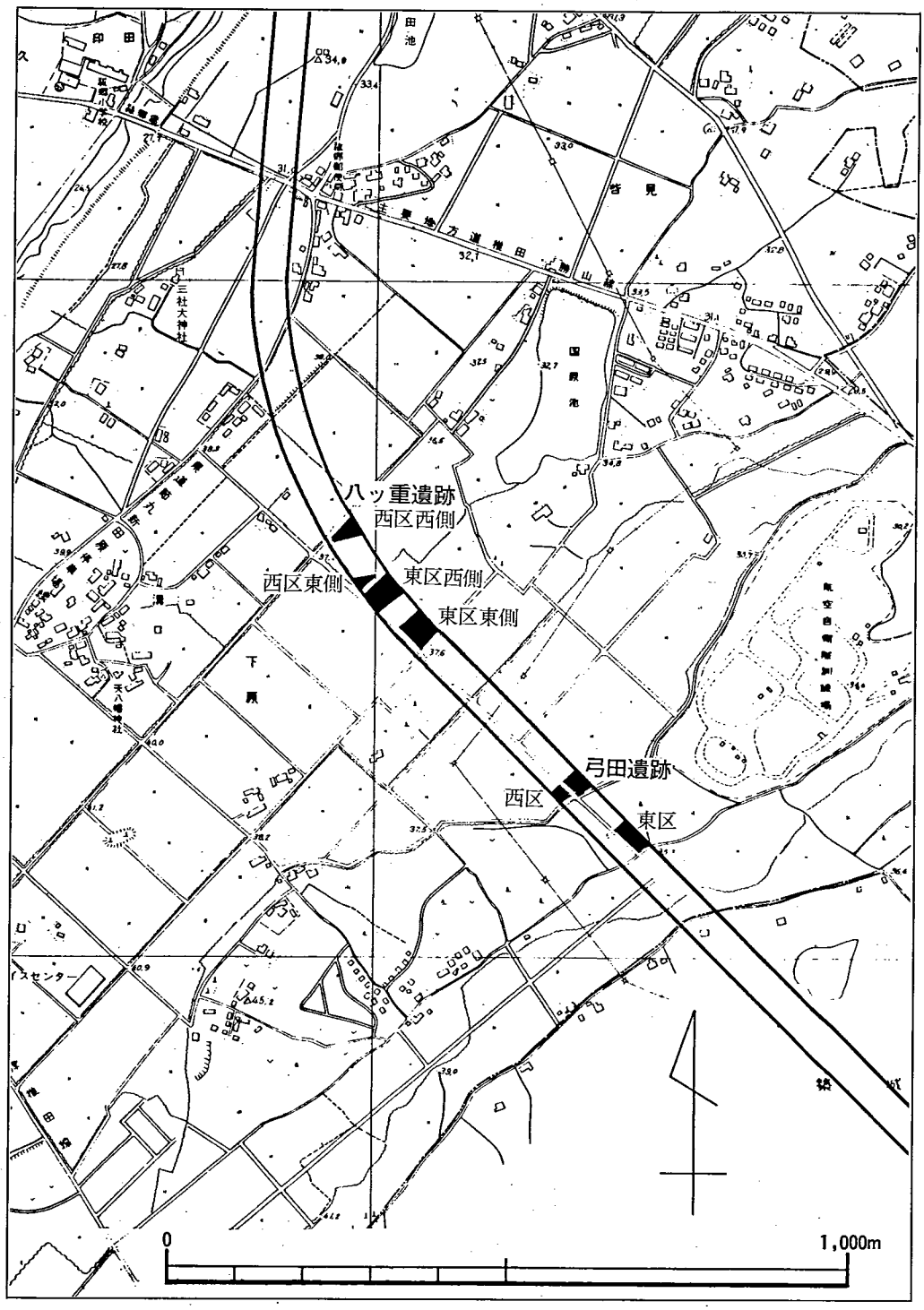
福岡県京都郡豊津町大字下原・呰見地区における一般国道10号椎田バイパス発掘調査のうち第Ⅱｃ地点および第Ⅱｂ地点、つまり弓田遺跡および八ッ重遺跡の発掘調査は昭和62年10月14日から昭和63年２月13日まで実施した。

弓田遺跡は福岡県京都郡豊津町大字下原字弓田・初山に所在し、調査予定地が２地区に分かれていたため、南東側を弓田遺跡東区、北西側を弓田遺跡西区として調査を行なった。調査面積は第１表に示すとおり弓田遺跡全体で3,300㎡で、そのうち発掘調査を実施したのが東区では1,334㎡、西区では1,076㎡の合計2,410㎡である。

弓田遺跡東区ではまず昭和62年10月14・15日に重機による表土の剝土作業を行なった。引き続き10月28日までクイ打ちに並行して遺構の検出作業を行なった結果、円形周溝状遺構２基・溝１条のほか数基の不整形土壙およびピットが検出された。11月16日までにすべての遺構を掘り終り、11月18日には全景および各遺構の写真撮影を終了した。さらに11月21日には

第１表　一般国道10号椎田バイパス第Ⅱｂ・ｃ地点遺跡名対照表

	調査地点名	調査面積	遺跡名	地区名	発掘面積
一般国道10号椎田バイパス	Ⅱｃ	3,300㎡	弓田遺跡	東区	1,334㎡
				西区	1,076㎡
				小計	2,410㎡
	Ⅱｂ	11,000㎡	八ッ重遺跡	東区東側	1,796㎡
				東区西側	1,600㎡
				西区東側	364㎡
				西区西側	618㎡
				小計	4,378㎡
	合計	14,300㎡	合計		6,788㎡



第１図　弓田遺跡・八ッ重遺跡地区区分図（縮尺 1/10,000）

全体の平板測量および実測が終り、弓田遺跡東区の調査を完了した。

弓田遺跡西区は現況が谷部に位置し水田となっていたことから、表土および水田床土の剝土作業に10月19日から10月23日まで要した。作業員による発掘調査は11月10日まで旧自然河川を中心に実施したが、遺構および遺物はほとんど検出されなかった。11月11日に全景写真撮影および平板による測量を行ない、西区の調査を完了した。

八ッ重遺跡は福岡県京都郡豊津町大字呰見字八ッ重に所在し、中央を南西から北東に流れる水路を境に南東側を東区、北西側を西区とし、さらに調査予定地内の試掘の結果、遺構の存在しないそれぞれの中央部を発掘しなかったため、東区の南東部を東区東側、北西部を東区西側、西区の南東部を西区東側、北西部を西区西側として４つの小区に分けて調査を実施した。調査面積は第１表のとおり八ッ重遺跡全体で11,000㎡、そのうち発掘調査を実施したのは東区東側で1,796㎡、東区西側で1,600㎡、西区東側で364㎡、西区西側で618㎡であり合計4,378㎡となる。

八ッ重遺跡東区東側は11月24日から12月２日まで重機による剝土作業を行なった。11月30日から12月３日まで遺構の検出作業をした結果、小谷および溝のほか多数のピットを確認した。作業は他の小区と並行して行ない、昭和63年１月11日に完了した。

八ッ重遺跡東区西側は12月２日から12月５日まで重機による剝土作業を行ない、12月15日までに遺構の検出作業およびクイ打ちを行なった。遺構は調査区西部に集中し、円形竪穴住居跡３棟・土壙２基・溝１条のほか多数のピットを確認した。12月22日まで作業員により遺構を掘り、各遺構の写真撮影は１月６日に行ない、実測等の作業が完了したのは２月４日である。

八ッ重遺跡西区東側は昭和63年１月11・12日に重機による剝土作業を行ない、１月14日までに遺構の検出が終ったが、遺構は溝とピットを検出したのみである。２月２日までにこれらの遺構を掘り終り、２月６日には実測作業を完了した。

八ッ重遺跡西区西側は１月７日から１月11日まで重機による剝土作業を行ない、１月22日に遺構の検出作業が終った。遺構は井戸１基の他は不整形の土壙とピットである。井戸は内部から礫および木材が出土したため、発掘および実測に時間を要しすべての遺構を掘り終ったのが２月６日である。その後クイ打ちおよび実測が２月13日に完了した。

なお八ッ重遺跡の全景写真についてはすべての遺構の完掘後気球による空中写真撮影をおこなった。

調査組織のうち豊津町教育委員会の構成については以下のとおりである。

豊津町教育委員会

教　育　長	吉田無佐治
社会教育課長	山田圀貴(前任)・千原豊之

社会教育係長　　坂田重孝(前任)・大倉麟太郎
社会教育課主事　秋吉良晴(前任)・末永弥義
なお発掘作業にあたっては以下の方々の協力を得た。
橋岡雄介・白谷健一(別府大学)・上田修・植村実徳・植村元次・西亨・井無田栄子・植村君子・植村清子・岡部百合子・奥村満江・加来末子・加来秀子・川本寿子・楠森ヨシ子・作田利衣・作田律子・末松浅枝・杉本豊子・田中千代乃・田中芳子・中尾イツ子・中原祝子・中村千代子・簑干カズノ・宮本信子
また発掘調査および報告書作成にあたり、宮小路賀宏・柳田康雄・高橋章・小池史哲・長嶺正秀・緒方泉・飛野博文の皆様方より御指導を得た。記して感謝の意を表したい。

第２章　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置

弓田遺跡・八ッ重遺跡は福岡県京都郡豊津町大字下原・呰見に所在する。豊津町は福岡県東部の周防灘沿岸地方に属する内陸の町である。町のやや東部に東経131度の子午線が通過し、今回調査した両遺跡はほぼ東経131度０分・北緯33度40分の位置にある。

豊津町の地形は大きく見て英彦山・犬ヶ岳山塊から北方に派生する多数の丘陵のうち、城井川と祓川、祓川と今川とで開析された二つの丘陵地および、祓川・今川の沖積平野とからなる。二つの丘陵はともに当町が所在する末端部では、小河川によってさらに複雑に開析されるとともに、高度を漸時減じて低段丘の洪積台地の様相を呈する。

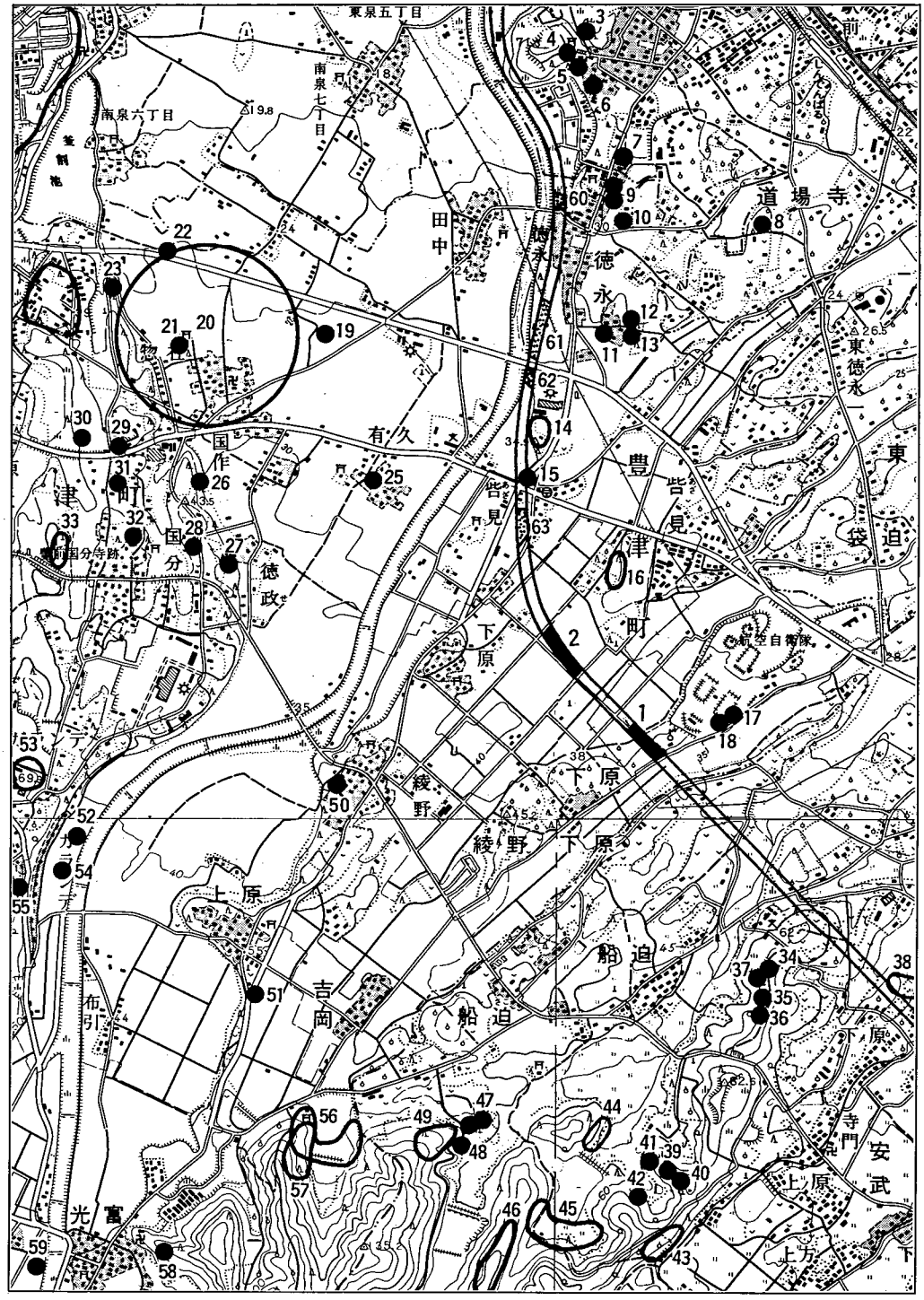
このうち弓田遺跡・八ッ重遺跡の所在する城井川と祓川に挟まれた東側の丘陵はこの付近で北東方向に屈曲し、周防灘沿岸地方では最大規模の洪積台地を形成する。この台地は両遺跡付近で標高35m～40m、幅は2.5kmをはかる。またこの台地も中央部に流れる音無川によって開折されるが、両遺跡はこの細かく開析された台地の西部に位置する。

２．周辺の遺跡

豊津町は奈良時代から平安時代において豊前国の国府および国分寺が設置され、古代を通じて政治・経済・文化の中心地であった。また弓田遺跡・八ッ重遺跡の所在する地域も『和名類聚抄』の仲津郡の条に「呰見」郷として記録されているように、歴史的に古くからその位置を認められている地域である。

行橋市・京都郡・豊前市・築上郡は現在総括して一般に京築地方と呼ばれているが、当地方における人類の足跡は古く、豊津町内では旧石器時代終末期に属すると考えられるナイフ形石器が長養池から採集されている（註１）。続く縄文時代においても、近年豊前市・築上郡等で多数の遺跡と豊富な遺物が確認されている（註２）。従来当地方は縄文時代においては人口稀薄な地域と考えられがちであったが、今後の道路整備・土地区画整理等の事業により、当地方の縄文文化がより一層明確にされるであろう。

弥生時代では沿岸部の小平野や行橋・京都平野ではすでに前期中葉の板付Ⅱａ段階から水田の開発が行なわれ（註３）、Ⅱｂ段階には行橋市下稗田遺跡第Ⅰ地点にみられるような数十棟の竪穴住居跡からなる大規模集落が形成されている（註４）。しかし、行橋・京都平野の縁



第２図　周辺主要遺跡分布図（縮尺　1/25,000）

辺部や祓川・今川中流域の沖積平野での開発は若干遅れ、大部分が中期に入って開発の主力が注がれるようになると考えられる（註５）。また後期では下稗田遺跡や京都郡苅田町木ノ坪遺跡（註６）が知られている。

古墳時代では前期の遺跡は比較的少なく、集落としては先の木ノ坪遺跡、墳墓としては苅田町石塚山古墳（註７）の首長墓や行橋市竹並遺跡（註８）の小古墳等が調査されている。５世紀代後半以降、特に６世紀代には各地域・小平野ごとに前方後円墳を中心とした首長墓が断続的に築造されている（註９）。６世紀代の群集墳は豊津町では節丸地区や祓川右岸の河岸段丘上面に多く分布する。またこの時期の集落については下稗田遺跡でその単位集団としてのあり方が確認されている。

７世紀後半以降の歴史時代に入ると当地方でも古墳の築造にかわって寺院が建立されるようになり、豊津町上坂廃寺は白鳳期に属することが確認されている（註10）。古代の主要道路である大宰府と宇佐を結ぶ官道は豊前国府推定地の南辺を北西－南東方向に走り、弓田遺跡・八ッ重遺跡付近では一般国道10号椎田バイパスにほぼ重複している（註11）。豊前国府は遅くとも８世紀前半代に豊津町大字国作・惣社地区に建設されはじめたと推定され、豊前国分寺も８世紀中頃同町大字国分に建立されたが、両遺跡付近はこの時期様々な階層の多くの人々が通過して行ったと思われる。また弓田遺跡の南方約1.5㎞には豊前国分寺の瓦を生産した築上郡築城町大字船迫の堂がへり窯跡群も分布する。

水田開発の面からみると、北西部の祓川左岸沖積平野や南西部の節丸地区および南方の城井川中流築城町安武地区等は弥生時代中期から古墳時代には大部分開発が進められ、現在も古代の条理地割が分布している。しかし両遺跡が所在する地域では古墳時代後期に墓地として利用されるが、洪積台地上で灌漑が困難であり、条理地割もみられないことから、生産の場としての開発は比較的遅れたものと考えられる。ただし「苦見」郷の存在からして、遅くとも10世紀前半には開発されていたと推定される。

なお第２図周辺主要遺跡分布図・第２表同一覧表については福岡県教育委員会『福岡県遺跡等分布図（行橋市・京都郡編および豊前市・築上郡編）』1976をもとに、川本義継「遺跡全般」『豊津町誌』1985を参考にして作製した。

（註）

１．栗焼憲児「京築地方の旧石器について」とよ７号、1983
２．小池史哲編「原井三ッ江遺跡」大平村文化財調査報告書第５集、1989
３．酒井仁夫編「葛川遺跡」苅田町文化財調査報告書第３集、1984
４．長嶺正秀・末永弥義編「下稗田遺跡」行橋市文化財調査報告書第17集、1985

5．酒井仁夫編「安永遺跡」築城町文化財調査報告書第１集、1984
末永弥義編「豊前国府」豊津町文化財調査報告書第８集、1989
6．木下修編「黒添・法正寺地区遺跡群」苅田町文化財調査報告書第６集、1987
7．長嶺正秀編「石塚山古墳発掘調査概報」苅田町文化財調査報告書第９集、1988
8．竹並遺跡調査会編「竹並遺跡」、1979
9．長嶺正秀「旧豊前国における古墳時代の動向と諸問題」行橋市文化財調査報告書第19集（前田山遺跡）1987
10．酒井仁夫「上坂廃寺」豊津町誌、1985
酒井仁夫・高橋章「豊前地方の８世紀代軒瓦について」九州考古学59、1984
11．日野尚志「豊前国京都・仲津・築城・上毛四郡における条理について」佐賀大学教育学部研究論文集第22集、1974

第２表　周辺主要遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	時代	備考	県遺跡番号
1	弓田遺跡		京都郡豊津町大字下原	古墳～平安時代		
2	八ッ重遺跡		〃　〃　大字呰見	弥生時代～中世		
3	居屋敷遺跡	墓地	行橋市大字道場寺	歴史時代		140313
4	寺屋敷横穴	横穴	〃　〃	古墳時代		140314
5	曼陀羅寺石塔群	石塔	〃　〃	室町時代		140316
6	鬼塚古墳	円墳	〃　〃　字鬼塚	古墳時代		140317
7	上人塚古墳	〃	〃　〃　〃	〃		140318
8	五反田池北遺跡	墓地	〃　〃　〃	弥生時代		140353
9	徳永イナリ古墳	円墳	京都郡豊津町大字徳永字宮ノ前	古墳時代		920002
10	中原古墳	〃	〃　〃　〃　字中原	〃		
11	京塚１号墳	〃	〃　〃　〃　字京塚	〃		920003
12	〃　２号墳	〃	〃　〃　〃　〃	〃		920004
13	〃　３号墳	〃	〃　〃　〃　〃	〃		920005
14	吹ヶ上古墳群	〃	〃　〃　大字呰見字吹ヶ上	〃	円墳４基、消滅	920006～920009
15	峰遺跡	散布地	〃　〃　〃　字峰	古墳～平安時代		920010
16	国富池遺跡	〃	〃　〃　〃　字国富	弥生～古墳時代		920011
17	三ッ塚１号墳	円墳	〃　〃　〃　〃	古墳時代		920012
18	〃　２号墳	〃	〃　〃　〃　〃	〃		920013
19	三角遺跡	散布地	〃　〃　大字国作字三角	平安時代		
20	豊前国府推定地	官衙	〃　〃　国作・惣社	奈良～平安時代	1984～1988年調査	920112
21	惣社八幡古墳	円墳	〃　〃　〃　惣社字鳥居	古墳時代		920024
22	幸木遺跡	散布地	〃　〃　〃　国作字幸木	奈良～平安時代	1976年調査	
23	惣社古墳	前方後円墳	〃　〃　〃　惣社字長畑	古墳時代		920025
24	柱松古墳群	円墳	〃　〃　〃　国作字柱松	〃	『幸木遺跡』で報告	920026～920030

25	有久古墳	円墳	京都郡豊津町大字有久字塚田	古墳時代		
26	松井遺跡	散布地	〃 〃 大字徳政字松井	平安時代		
27	徳政瓦窯跡	窯跡	〃 〃 〃字下村	奈良時代		920017
28	豊前国分尼寺跡	寺院	〃 〃 〃〃	奈良～平安時代		920018
29	辻ノ後遺跡	散布地	〃 〃 大字国分字辻ノ後	弥生時代		920020
30	北原遺跡		〃 〃 〃字北原	弥生時代～近世	『北原遺跡』1988年	
31		寺院	〃 〃 〃〃	奈良時代？	豊前国分寺関連礎石	
32	豊前国分寺跡	〃	〃 〃 〃字寺屋敷	奈良時代～近世	国指定史跡	920111
33	正道遺跡	集落	〃 〃 〃字正道	奈良～平安時代	1988年調査	920019
34	火箱1号墳	円墳	築上郡築城町大字船迫	古墳時代		950001
35	〃 2号墳	〃	〃 〃 〃	〃		950002
36	〃 3号墳	〃	〃 〃 〃	〃		950003
37	火箱遺跡	墓地	〃 〃 〃	弥生時代		950004
38	双子池遺跡	散布地	〃 〃 大字安武	〃		950076
39	堂がへり1号墳	円墳	〃 〃 大字船迫	古墳時代		950005
40	堂がへり2号墳	〃	〃 〃 〃	〃		950006
41	堂がへり窯跡A	窯跡	〃 〃 〃	奈良時代		950007
42	〃 窯跡B	〃	〃 〃 〃	〃		950008
43	朝日寺古墳群	円墳	〃 〃 大字安武	古墳時代	消滅	950024
44	茶臼山窯跡	窯跡	〃 〃 大字船迫	奈良時代		950011
45	中の丸遺跡	散布地	〃 〃 〃	弥生時代		950009～950010
46	ひめゆり古墳群	円墳	〃 〃 〃	古墳時代	円墳4基	950012～950015
47	水上古墳群	〃	〃 〃 〃	〃	円墳2基	950016～950017
48	宇土窯跡	窯跡	〃 〃 〃	奈良時代		950023
49	裏ヶ迫古墳群	円墳	〃 〃 〃	古墳時代	円墳5基、一部消滅	950018～950022
50	イモジ古墳群	〃	京都郡豊津町大字綾野字イモジ	〃	円墳3基	
51	上原遺跡	墓地	〃 〃 大字上原字平塚	〃		920079
52	中村遺跡	散布地	〃 〃 大字上坂字中村	奈良～平安時代		
53	ガランデ遺跡	〃	〃 〃 大字豊津字ガランデ	弥生時代	大部分消滅	920070
54	上坂廃寺	寺院	〃 〃 大字上坂	7C後半～奈良時代	県指定史跡	920074
55	平遺跡	墓地	〃 〃 〃字平	弥生時代	1979年調査	
56	頭無池遺跡	散布地	〃 〃 大字吉岡字頭無	〃		920080
57	頭無池西古墳群	円墳	〃 〃 〃〃	古墳時代	円墳5基	
58	上ノ山遺跡	経塚	〃 〃 〃光富字上ノ山	室町～江戸時代		920082
59	黒坪遺跡	集落	〃 〃 〃字黒坪	弥生時代		
60	居屋敷遺跡	横穴	〃 〃 大字徳永字居屋敷	古墳時代	椎田バイパス関係	
61	川の上遺跡	古墳	〃 〃 〃字川の上	弥生～古墳時代	〃	
62	神手遺跡	集落	〃 〃 〃字神手	〃	〃	
63	カワラケ田遺跡	〃	〃 〃 大字背見字カワラケ田	〃	〃	

第3章　弓田遺跡・八ッ重遺跡の調査

第1節　弓田遺跡の調査

1．はじめに

弓田遺跡は先にも述べたように音無川により複雑に開析された洪積台地の小丘陵地の一つにあり、築上郡築城町との境界に隣接する。この丘陵の本遺跡北側は現在航空自衛隊ナイキ基地となっており、基地内には小円墳が3基（現存2基）存在する。

調査区の設定については事前の試掘調査の結果にもとずき、この丘陵の南東側斜面で、基地敷地フェンスと南西側・南東側の町道とで囲まれた地域を弓田遺跡東区とし、丘陵北西の谷部の路線内を弓田遺跡西区とした。

2．弓田遺跡東区の調査

弓田遺跡東区は現況では原野となっていたが、地元の住民の話によると数年前までブドウ畑として開墾されていたといい、調査時においてもブドウの木を植えた溝状の痕跡や支柱の材料等を検出した。

発掘調査区は第3図に示すとおり幅約29m・長さ約51mの長方形の区画で、北西から南東に下がる斜面をなす。表土の堆積は斜面上位の北西部平坦面付近では約10cmと浅く、斜面下位の南東部では約30cmをはかる。

遺構は斜面上位には存在せず、中位に円形周溝状遺構が2基、中位から下位にかけて溝が1条と不整形の土壙が2基と大形のピットが1基検出されたのみである。斜面上位平坦面に遺構がないのは開墾による削平の可能性も考えられるが、この丘陵自体が尾根線の平坦面が狭く居住地には適さないということも考えられる。

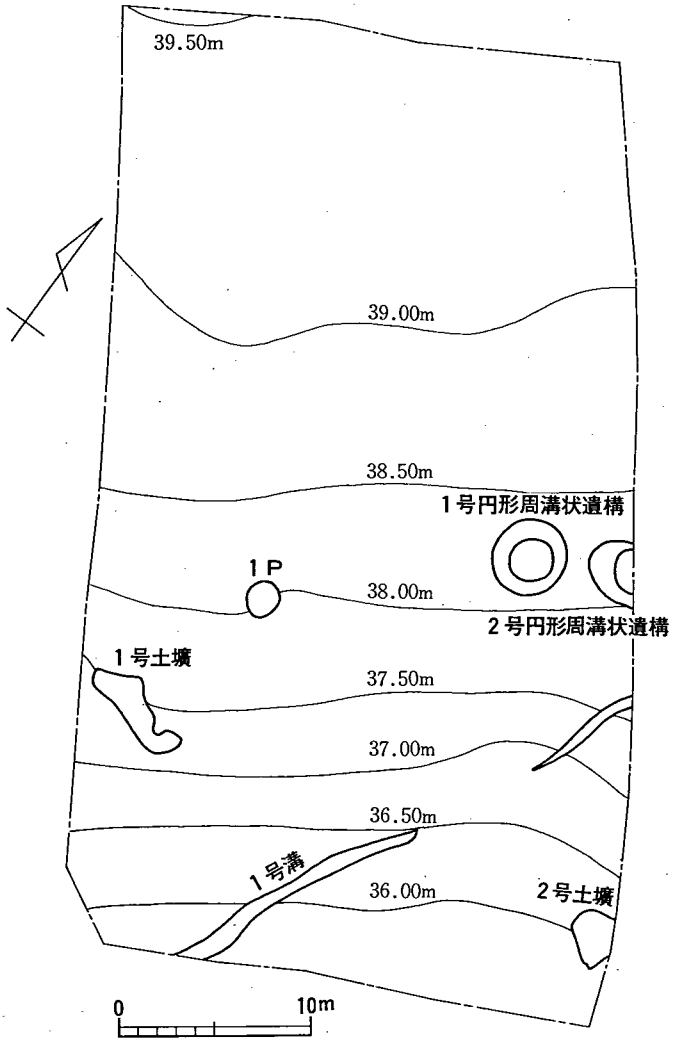
（1）円形周溝状遺構

1号円形周溝状遺構（第4図）

1号円形周溝状遺構は斜面中位の標高38.00mと38.50mの間にある。

平面形は南北方向にやや長いがほぼ円形をなし、長径412cm・短径388cmである。溝はほぼ円形にめぐり、幅は広い西側で102cm、狭い東側では64cmである。また溝の深さは西側で21cm、

東側で10cmと浅く、溝で囲まれた中央部は平坦面をなし長径253cm・短径218cmであり、全体的に上面が削平されていると考えられる。溝底部には最大で径21cm・深さ38cm程度の円形小ピットが9基確認され、この遺構にともなうものと考えられる。また溝埋土中より5個体前後の土師器・須恵器が出土した。なお溝の断面は基本的に浅いU字状を呈し、溝内埋土はⅠ層が暗灰色土層、Ⅱ層が暗黄灰色土層、Ⅲ層が黄灰色土層である。

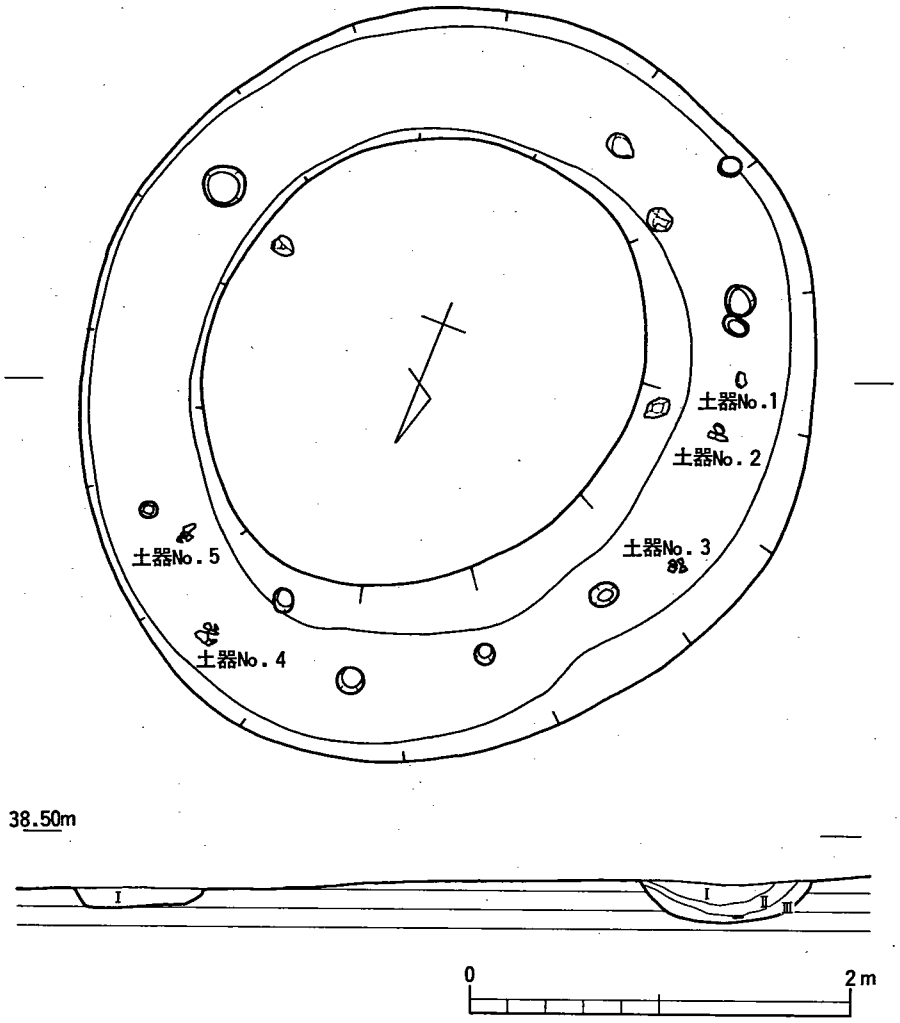


第3図　弓田遺跡東区全体図（縮尺 1/400）

1号円形周溝状遺構出土遺物（第5図）

1号円形周溝状遺構は溝内埋土から5個体前後の土師器と須恵器が出土している。

1は遺構実測図中に示した土器№2で、表面の保存状態が不良のため判断しにくいが土師器の杯と考えられる。法量は推定で口縁径13.4cm・高台径9.2cm・器高3.8cmである。器形はほぼ水平な底部に低い逆台形の高台がつき、体部は高台付け根部から屈折して外上方に直線的に立ち上がる。色調は明黄灰色を呈する。2は土器№5で須恵器の体部から口縁部にかけての破片であるが、器種は不明である。体部が直線的に立ち上がり、口縁部が小さく外反する。3は土器№4で土師器の椀の破片で、法量は推定で口縁径14.7cm・底径12.2cm・器高5.4cmである。器形はやや丸底気味の底部から、体部が稜をつくって屈折し、わずかに内湾しつつ直立気味に立ち上がる。色調は明赤褐色である。



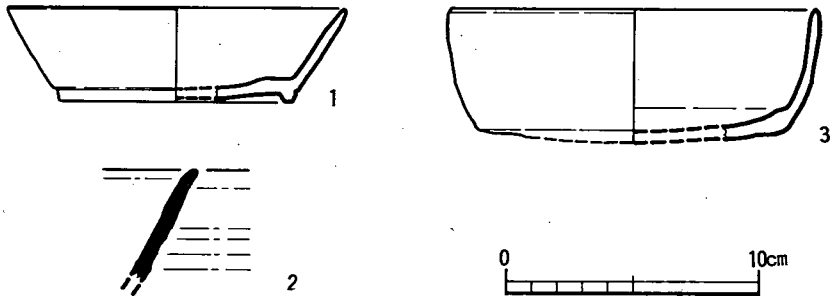
第4図　弓田遺跡東区1号円形周溝状遺構実測図（縮尺 1/40）

2号円形周溝状遺構

1号円形周溝状遺構の東側に隣接し、東半分は調査区外である。平面形は東西に長い楕円形を呈し南北短径約320cmで、溝の幅は最も広い西側で約140cm、深さは26cmである。出土遺物はまったくない。

（2）その他の遺構と遺物

1号溝



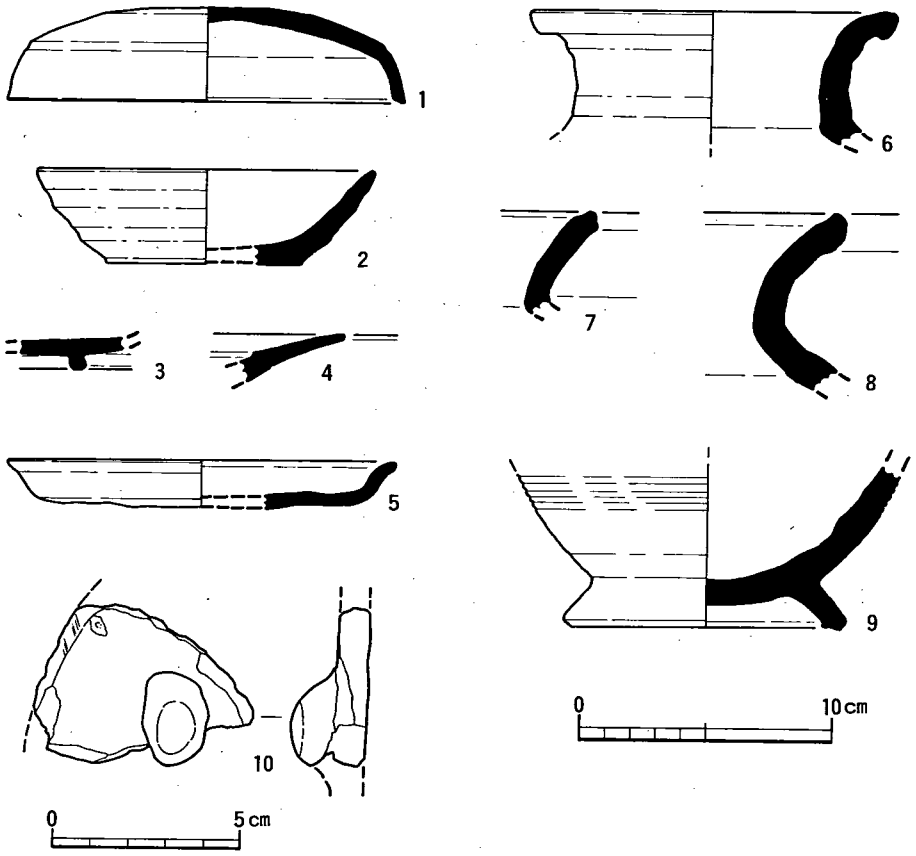
第５図　弓田遺跡東区１号円形周溝状遺構出土遺物実測図（縮尺 1/3）

調査区の斜面中位から下位にかけて、南北方向に調査区東部を横断する。遺構検出面では途中切れているが本来一連のものと考えられ、総延長27.6m、幅は残りの良い南端で95cm、深さは15cmである。断面形はU字をなす。溝底部の高さは北端で37.25m、南端で35.56mと1.69mの比高差がある。出土遺物はない。

その他の遺構出土遺物および表採遺物（第６図）

弓田遺跡東区から出土した遺物は須恵器が多い。

１は表採遺物で須恵器の蓋である。法量は口縁径15.6cm・器高3.7cmである。器形は天井部がやや高く、体部下位に向かってわずかに内湾しながら下がる。体部と口縁部の境は稜をつくって屈曲し、口縁端部は内縁部が一段高く、外縁部で接地する。調整は天井部から体部下位屈曲部までの間に回転ヘラケズリを施す。色調はアズキ色を呈する。２は１号ピットから出土した須恵器の杯で、推定法量は口縁径13.3cm・底径7.8cm・器高3.8cmである。器形は底部が平底をなし、体部がわずかに内湾気味に開く。表面調整は底部をのぞくとすべてヨコナデである。胎土および焼成はともにやや不良である。３は表採遺物で須恵器の杯の底部破片である。高台部の径が約7.6cm前後である。平底の底部に、高台はわずかに外反し、体部が高台の外方から立ち上がると考えられる。４は須恵器かまたは灰釉陶器かと考えられ、器種は段皿の可能性がある。口縁径が約14cm前後で、体部上位内面に段を有し、口縁部はしだいに薄くなりながら直線的に開く。内面には薄く釉がかかる。色調は明灰色である。５は表採遺物の須恵器の皿である。推定法量は口縁径15.3cm・底径8.0cm・器高1.9cmである。器形は底部中央がやや低いがほぼ平坦な形状をなし、体部は外上方に屈曲して短かく伸び、口縁部が小さく外反する。底部は回転ヘラ切りである。６は表採遺物の須恵器で、壺または甕の口縁部である。口縁径推定14.4cmをはかる。頸部が直立し上位でやや外反し、口縁部は水平に開いて端部を玉縁状に肥厚させる。７は１号土壙から出土した須恵器の口縁部である。内外面ともに自然釉が厚くかかる。８は表採遺物で須恵器の甕と考えられる口縁部の破片である。やや大形で口縁径約23.5cm前後をはかる。頸部からくの字状に外反しながら立ち上がり、口縁端部をやや肥厚させる。９は表採遺物で須恵器の壺の体部下位から底部にかけての破片で



第６図　弓田遺跡東区出土遺物実測図（縮尺 1/3、10は1/2）

ある。法量は高台径11.1cmで、器形は丸底の底部に外反する大きい高台がつく。体部外面にはヨコ方向に櫛歯状工具による５条前後からなる沈線状の条痕がみられる。

土製品（第６図10）

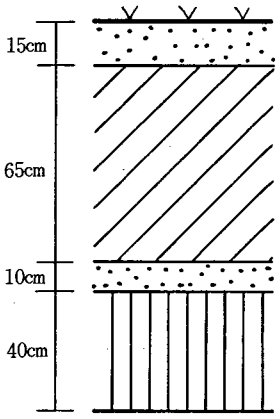
10は表採遺物で用途不明の土製品である。平面形は円形ないし楕円形をなし、表面に幅1.7cm・長さ2.5cm・高さ1.1cmのコブ状の突起をつける。周縁部には部分的に擦過痕がみられ、裏面には細かい敲打痕がみられる。焼成は須恵質である。

3．弓田遺跡西区の調査

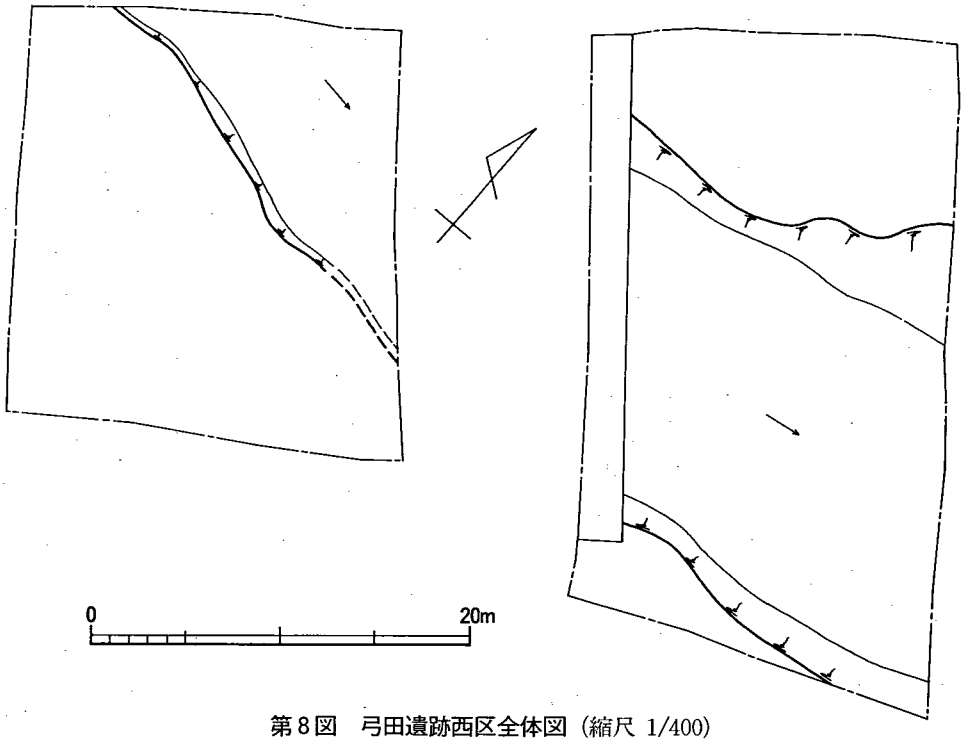
弓田遺跡西区周辺は現況では水田となっているが、現在の水田区画は1968年に実施されたほ場整備事業によるもので、それ以前の地形は不明である。

発掘調査は第８図に示すとおり中央部を北西－南東方向に走る町道を狭んで、ほぼ路線いっぱいの幅約50m、長さは東端で36mの台形の区画で実施した。

人為的な遺構はまったく検出されず、遺物についても自然の流木がわずかにあるが木製品と考えられるものはほとんどない。自然地形としては小河川が西から東へと流れている。この小河川は検出面での幅が西側で約17m、東側で約24mをはかり、底部は西側で約15m、東側で約17mであり、全体として下流の東側にいくにつれて川幅が広くなっている。深さ



第７図　弓田遺跡西区東壁面
自然河川内土層概念図



第８図　弓田遺跡西区全体図（縮尺 1/400）

は検出面から最も深いところで約40cm、現地表面からは約130cmをはかる。調査区東端部壁面での土層は現地表から15cmが現耕作土層、その下位の65cmがほ場整備時の客土と考えられる赤褐色土層、さらにその下10cmが旧地表面と考えられる黒色土層が堆積し、その下にはじめて厚さ40cmにわたる自然河川内堆積層の暗灰色粘質土層がある（第７図)。なお川底部の高さは西端で標高34.31m、東端で34.07mと24cmの比高差をなす。

4．小　結

以上述べてきたように弓田遺跡全体としては遺構の密度が粗であるが、東区の出土遺物からわかるように、この小丘陵において古墳時代後期から奈良時代・平安時代にかけて人間の活動があったことは明らかである。

弓田遺跡東区

東区で検出した主な遺構のうち円形周溝状遺構についてはその性格・用途がいかなるものかまったく不明である。ただし周溝の径４m前後、内部平坦面径2.5m前後という規模の面および、周溝内から破砕された状態で出土した土器や礫の問題を考えるならば、住居跡や生産関係の遺構ではなくむしろ宗教的な性格の遺構であり、極言するならば埋葬施設ではないかと推定される。またその使用された時期については周溝内出土の土師器椀３がやや古い特徴を示すが、杯１の存在から８世紀代に属するものと考えられる。つぎに１号溝については出土遺物がなく時期は確定できない。ただ斜面のあり方を無視して、ほぼ南北方向に走っている点には注意を要する。

東区の所在する小丘陵は南西から北東方向に伸びているが、本調査区の北東側はやや広い尾根上の平坦面を有し古墳群が営まれており、南西側も広い平坦面を有する。本調査区の付近では平坦面がほとんどなく鞍部の様相を呈しており、調査結果からもわかるように生活の場としての利用価値はほとんどなかったと考えられる。ただ古代において大宰府と宇佐を結んだ官道がこの付近を通過しており、この鞍部状の地形を利用していたことも推定されるが、関連するような遺構は検出されなかった。

弓田遺跡西区

西区で確認した自然河川は音無川の一支流と考えられるもので、一時期において音無川の一部がこの小丘陵を削るように北西側を東方ないし北東方向に流れていたことが判明した。ただその時期については戦後しばらくの間までこの下流数百メートルの地点に小さい池があったという伝聞があることから、小なくとも近代以前には流水があったと推定される。

第2節　八ッ重遺跡の調査

1．はじめに

八ッ重遺跡は西側を南から北へと流れる祓川の右岸の洪積台地にあり、上位の河岸段丘崖からは約300m 前後の距離をおいている。周知の遺跡としては北東約300m の地点に弥生時代から古墳時代にかけての遺物散布地である国富池遺跡があるのみで、比較的遺跡が乏しいと考えられていた地域である。

調査区の設定については事前の試掘調査および本調査に並行しておこなった試掘調査の結果にもとずき、以下のとおり区分した。まず調査予定地中央部を南西から北東に流れる農業用水路を挟んで南東側を東区、北西側を西区とした。さらに東区では中央部が削平により遺構が存在しないことがわかり、この部分を残土置場とし、その南東部を東区東側、北西部を東区西側とした。また西区についても同様に中央部に東西方向に自然河川ないしは小谷が存在したことから、遺構がほとんど検出されず、その両側の平坦面ないし傾斜面付近を発掘調査区とし、南東部については西区東側、北西部は西区西側とした。

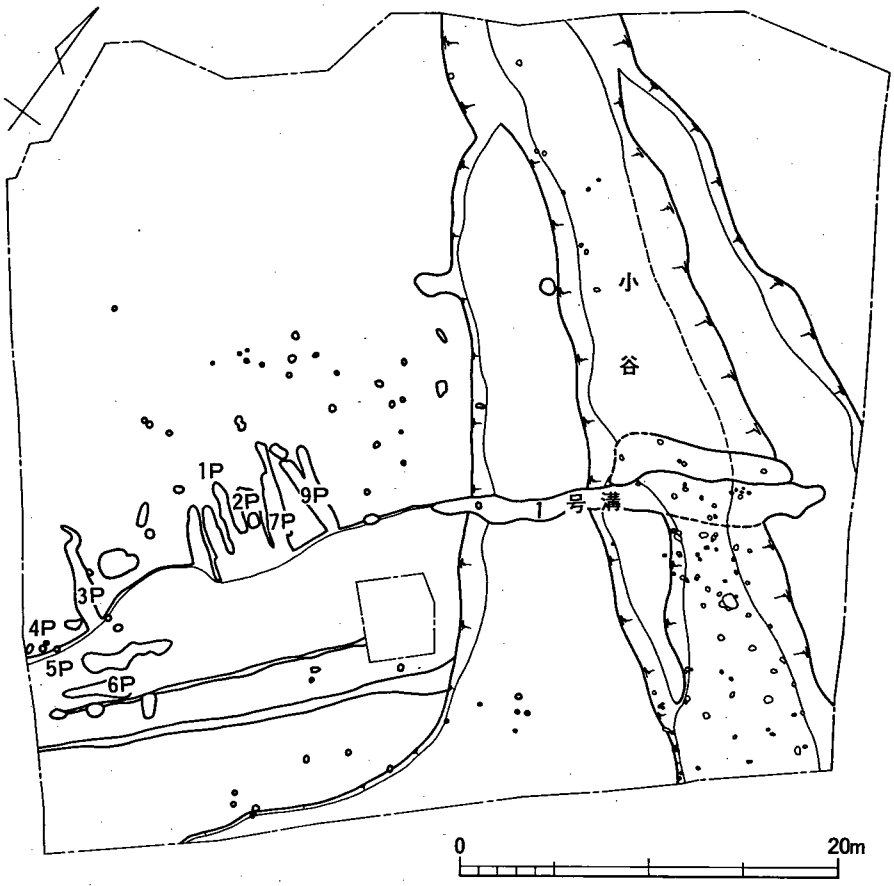
2．八ッ重遺跡東区東側の調査

八ッ重遺跡東区東側は現況では水田となっている。発掘調査区は北東辺を路線幅いっぱいに取り、幅46m ・長さ43m の方形の区画とした（第９図)。遺構面は総じて北西部で浅く現地表面から15cm程度、南東部では深く150cmをはかる。

調査区北西部は開墾および1968年のほ場整備事業の際に削平されたと考えられ、遺構は存在せず、南東部において溝を３条検出したほかはピットを70基前後確認したにとどまる。

（1）小　谷

調査区の北東半を北西から南東にくだる小谷を確認した。小谷の幅は北西端で9.5m であるが、段落ち中位にあらわれる平坦面がしだいに広くなり南東端では推定で28m 前後になる。谷底部には礫が散在し、底部は北西端で高さ35.62m ・深さ70cm、南東側では高さ34.40m ・深さ98cmである。また埋土中からは弥生土器片や須恵器片が出土したが、中世以降に属する遺物はほとんどみられなかった。なお小谷内埋土は底部付近で明灰色粘質土層をなすが、それより上位では土層の変化がほとんどない暗褐色土層が厚く堆積し、非常に短かい期間にこの小谷が埋没したことが想定される。



第９図　ハッ重遺跡東区東側全体図（縮尺 1/400）

小谷出土遺物（第10図３）

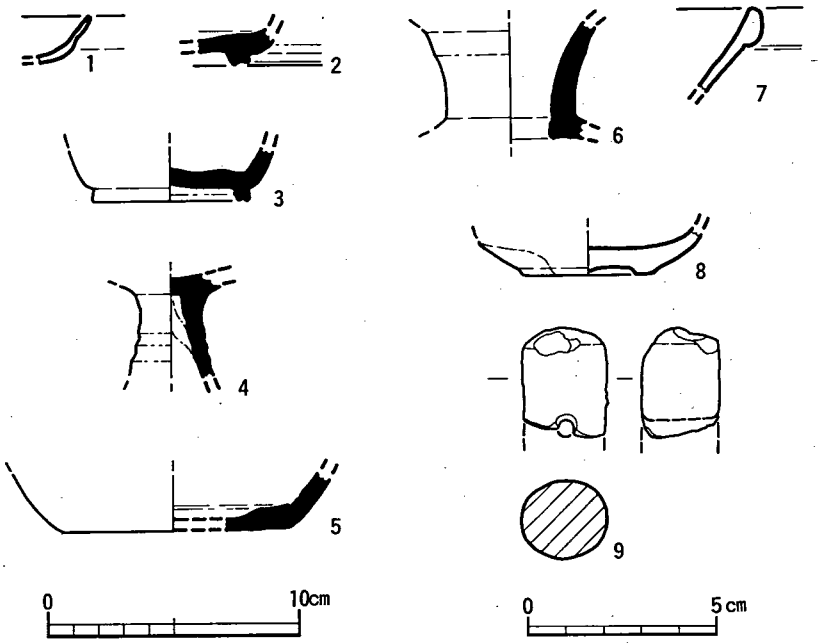
３は暗褐色土層から出土した須恵器の椀で、高台径推定6.2cmである。全体的に小形の器形で、ほぼ直立する低い高台から直接体部が上方に立ち上がる。

（２）その他の遺構と遺物

確認した遺跡のうち調査区南部にある、南西―北東方向の２条の溝はほ場整備以前の水田区画にともなう溝であり、またその北西側にある北西―南東方向の数条の溝状遺構も埋土の状況からみてごく新しいものである。

１号溝

小谷を横断するように切る溝で、最大幅220cm・長さ20.8ｍをはかる。出土遺物は少なく少量の弥生土器片と須恵器片を出土した。



第10図　八ッ重遺跡東区東側出土遺物実測図（縮尺 1/3、9は1/ 2）

第10図4は埋土中から出土した須恵器の高杯である。脚部は上位が円筒状を呈し、裾部にかけてしだいに開く。脚部内面上位にはしぼり痕がある。

その他の遺構出土遺物および表採遺物（第10図）

1は4号ピットから出土した土師器の皿で、やや内湾気味の体部から、口縁部が稜をつくって直線的に伸びる。器厚は薄い。2は2号ピット出土の須恵器の杯である。高台は内縁部で接地し、体部は高台部から水平に伸びたのちに屈曲して立ち上がる。5は4号ピット出土の須恵器である。器種は不明であるが底部推定径9.1cmをはかる。平底の底部から体部が内湾気味に立ち上がる器形をなす。6は表採遺物で須恵器の壺頸部の破片である。頸部が体部から屈折して立ち上がり、上位で外方に屈曲する。外面全面および頸部内面の一部に厚く自然釉がかかる。7は表採遺物で白磁の椀である。口縁径は推定で15.6cmで、口縁端部が玉縁を呈し、体部との境に沈線状の段を設ける。Ⅳ類に属する。8は表採遺物で施釉陶器の椀底部の破片である。高台は低く中心部から削り出し、径5.2cmで、体部は下位で屈曲して立ち上がる。素地は赤褐色で内面全面と体部外面に乳白色の釉を施す。

土製品（第10図9）

9は表採遺物で用途不明の土製品である。断面径2.2cmの棒状の形態をなし、1ヶ所に片面から穿った孔を有する。色調は明赤褐色をなす。

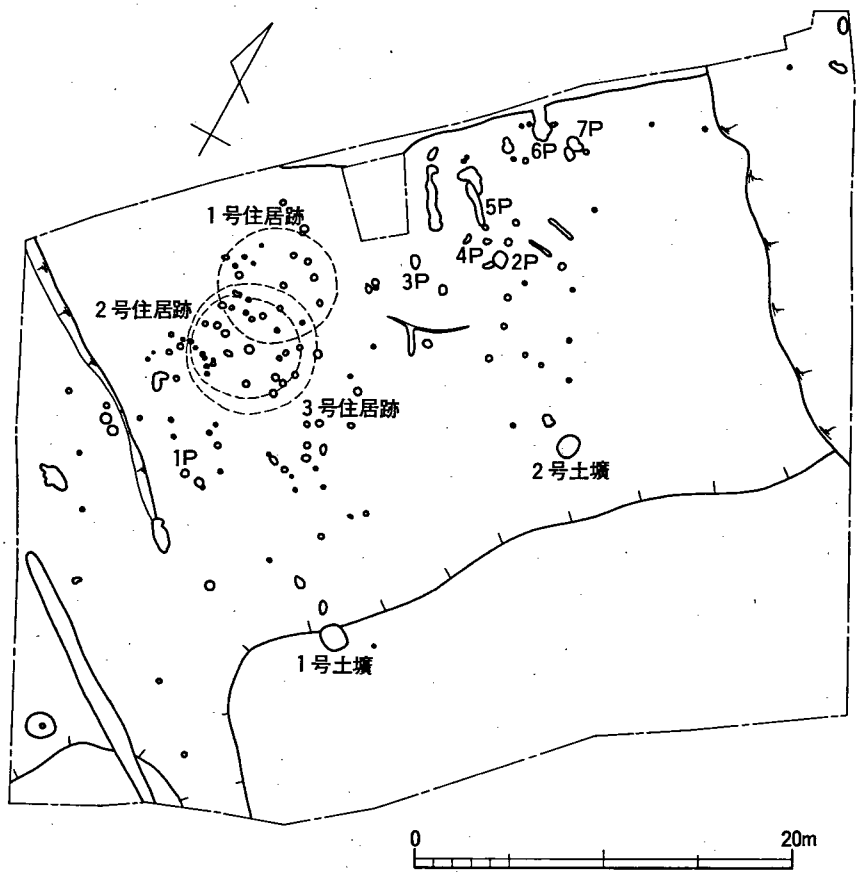
3．八ッ重遺跡東区西側の調査

八ッ重遺跡東区西側は現況は水田となっている。発掘調査区は北東辺を路線幅いっぱいに取り、幅44m・長さ37mの菱形の区画となった（第11図）。

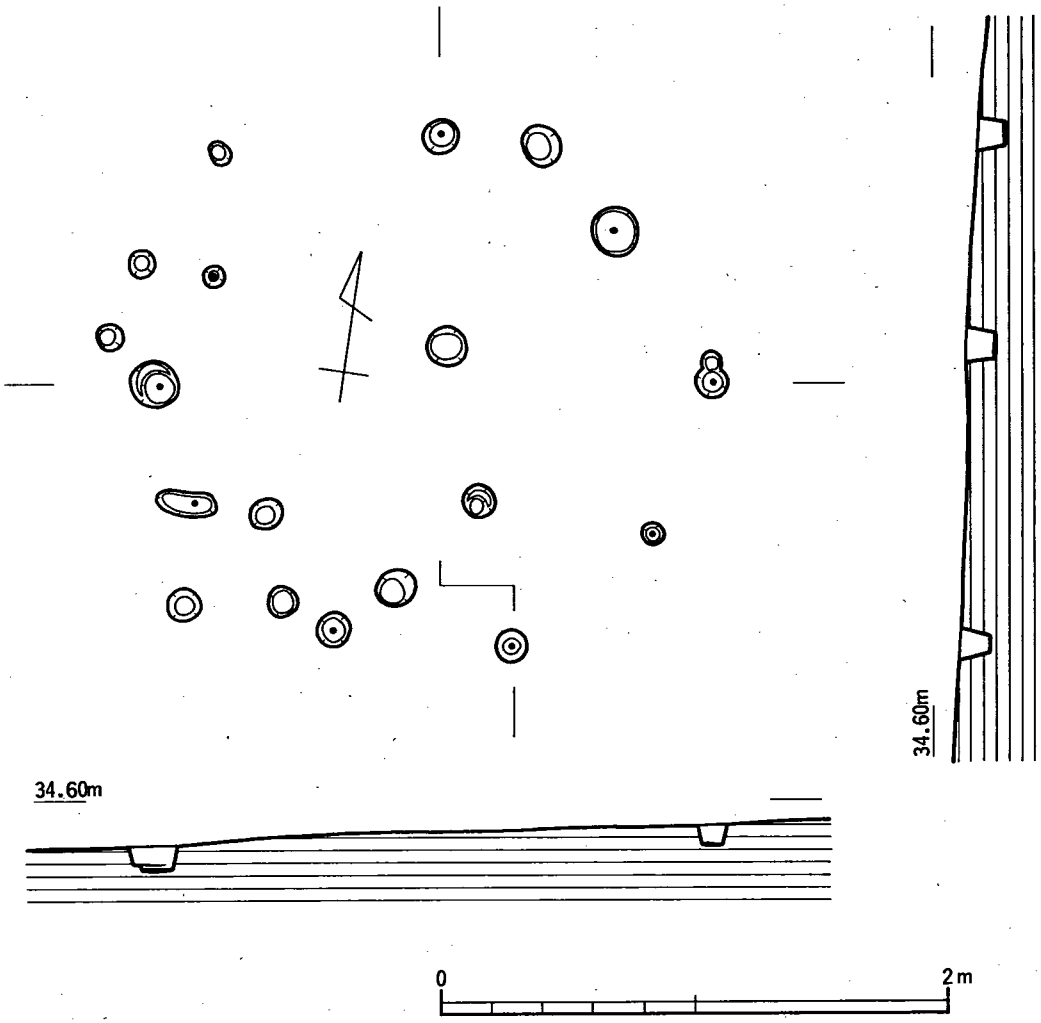
遺構面は南東側で高く、北西側で低いがほぼ平坦で比高差160cm程度である。遺構は南東側約三分の一の部分で削平が著しくほとんど検出されなかったが、他の部分から住居跡３棟・土壙２基・溝１条のほか多数のピットを検出した。

（1）住居跡

住居跡は３棟分検出されたがすべて調査区北西部に集中しており、円形に配された柱穴のみで床面から上位は削平されていた。また柱穴内からの出土遺物もまったくない。



第11図　八ッ重遺跡東区西側全体図（縮尺 1/400）

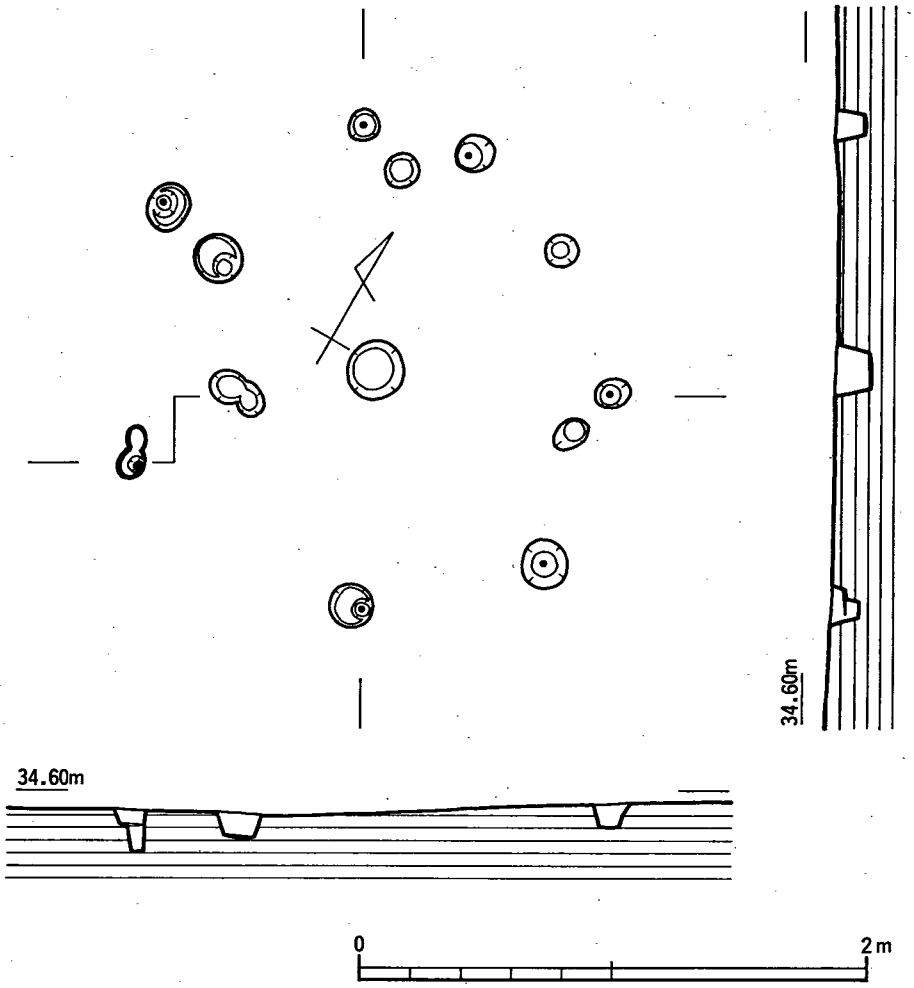


第12図　八ッ重遺跡東区西側１号住居跡実測図（縮尺　1/60）

１号住居跡（第12図）

ほぼ円形に配された９基の柱穴を確認した。柱穴心々間で計測した住居跡の径は東西方向で4.4m をはかり、柱穴外方に１m の空間をとって壁面が存在すると仮定して円形竪穴住居跡として復元すれば径6.5m 前後の規模になる。また柱穴心々の間隔は平均140cmである。柱穴の大きさは最大のもので径40cm、最小のものは径18cmと相対的に小さい。また柱穴の深さは最も深いもので28cmであり、炉跡が検出されなかったことと考え合わせて、上面がかなり削平されていると思われる。

２号住居跡（第13図）

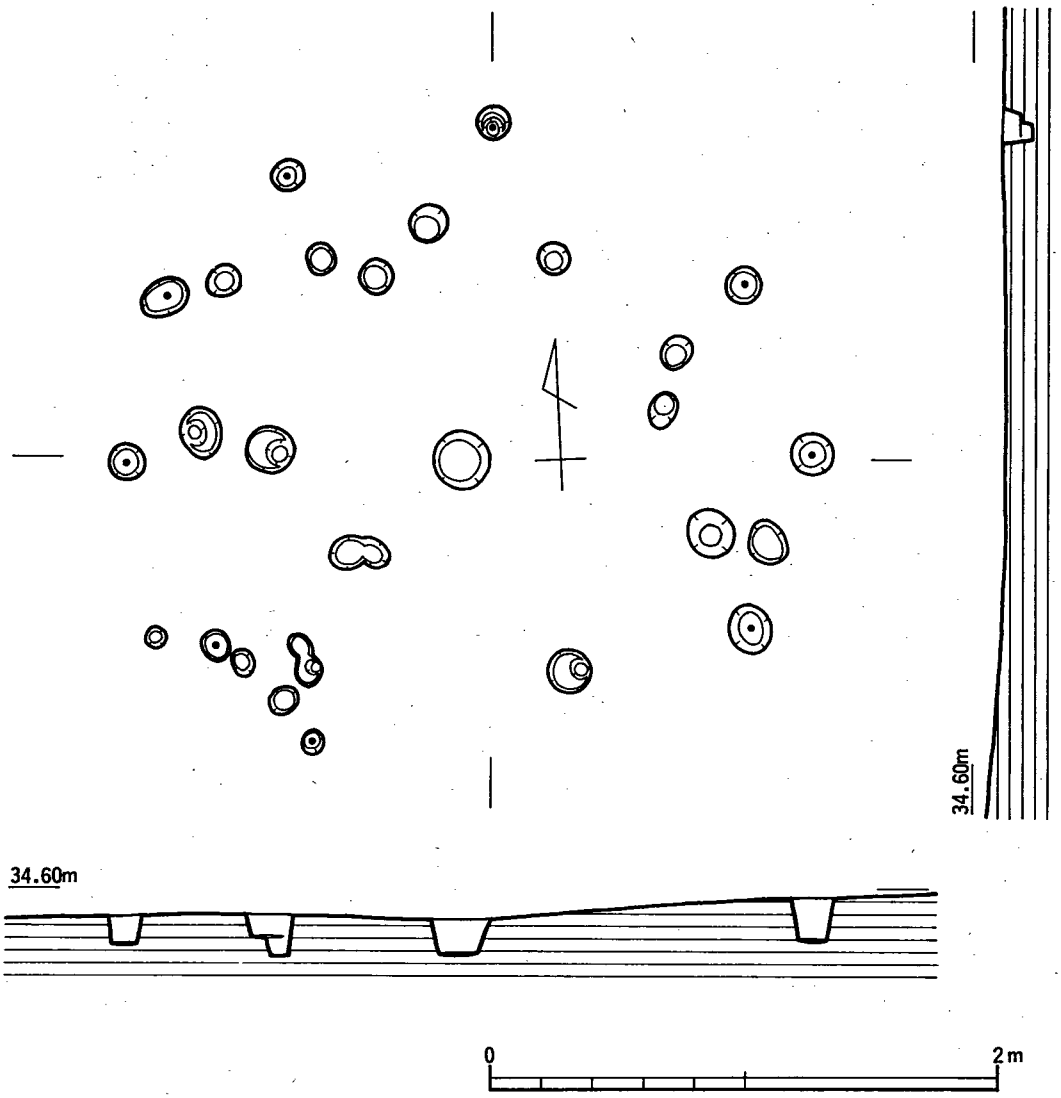


第13図　八ッ重遺跡東区西側２号住居跡実測図（縮尺 1/60）

やや楕円形に配された７基の柱穴を確認した。柱穴心々間で計測した住居跡の径は東西方向で4.2m 、南北方向で3.6m である。１号住居跡と同様に壁面を考慮すれば径６m 前後の竪穴住居跡となる。柱穴心々の相互の間隔にはややばらつきがあるが、平均170cm前後である。柱穴の大きさは最大のもので径38cm、最小のものは径24cmとやや小形である。柱穴の深さは最も残りの良いもので41cmである。また中央部にあるピットはこの住居跡にともなうものかどうか不明である。

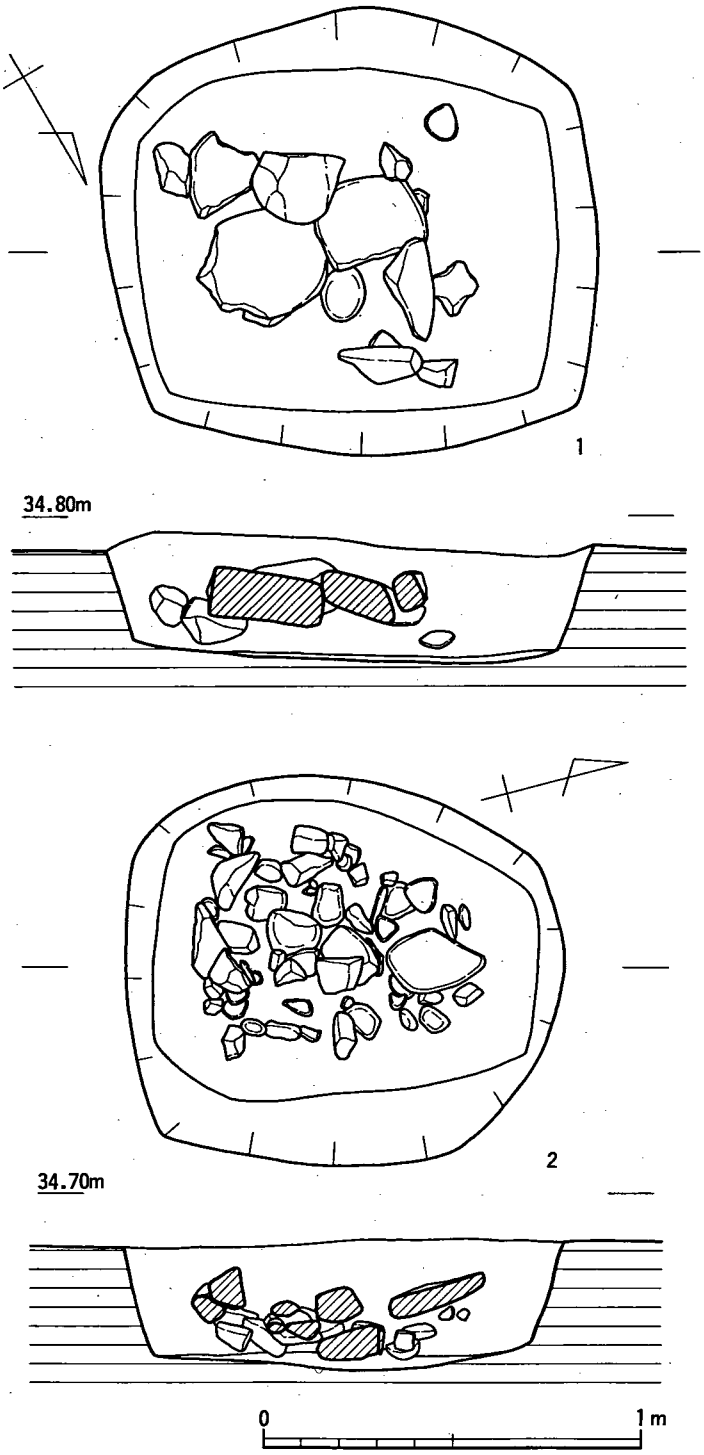
３号住居跡（第14図）

２号住居跡の柱穴の外周にさらに円形に柱穴が９基配置されている。規模は３棟のうちで



第14図　ハッ重遺跡東区西側３号住居跡実測図（縮尺 1/60）

最大で、東西方向で5.4m 、南北方向で5.1m をはかる。竪穴住居跡として床面を推定すれば径7.5m 前後となる。柱穴心々の相互の間隔は平均160cm前後である。柱穴は総じて小形のものですべて径34cm以下であり、深さは最も深いもので33cmである。炉跡は不明である。なお南東部では柱穴間の距離が広くなっているが、検出できなかった柱穴が１ないし２基存在したものと考えられる。



第15図　八ッ重遺跡東区西側土壙実測図
1－1号土壙、2－2号土壙（縮尺 1/20）

（2）土　壙

方形の掘り方をなし、内部に礫を有するやや小形の土壙を2基検出した。2基の間隔は15mあり、各々孤立したような配置をとる。

1号土壙（第15図1）

1号土壙は調査区南部に位置し、北西一南東方向に長軸をとる。規模は検出面で長さ130cm・幅118cmであり、床面は長さ111cm・幅90cmである。平面形態はやや隅丸の長方形をなす。深さは35cmである。内部から十数個の礫が出土した。礫は大部分花崗岩系の円礫で、最大のもので長さ30cmであるが、ほとんど20cm前後のものである。ほかに出土遺物はみられなかった。

2号土壙（第15図2）

調査区中央部やや東よりに位置し、ほぼ南北方向に長軸をとる。規模は検出面で長さ116cm・幅103cm、床面では長さ102cm・幅80cmである。ややいびつな形態

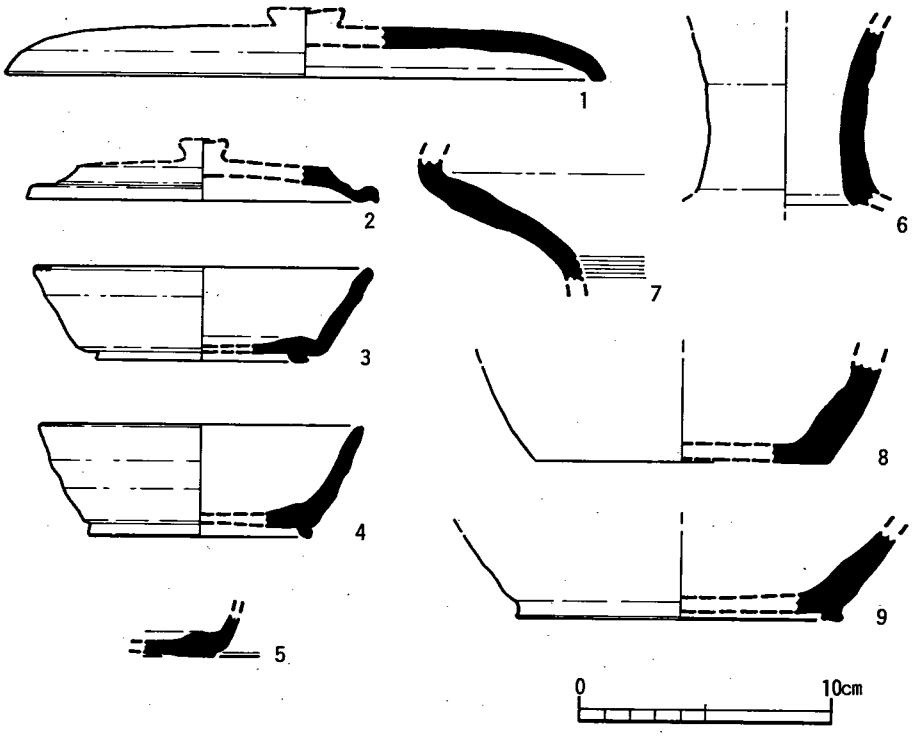
をなすが基本的には長方形と考えられる。深さは34cmである。1号同様内部から多数の礫を出土した。礫は60個前後あり、大部分花崗岩系の円礫で、最大のもので長さ26cmであるがほとんど1号より小形の5cm～15cm程度のものである。細かい炭化物がわずかにみられたがほかには出土遺物はない。

（3）その他の遺構と遺物

その他の主な遺構としては調査区南端部を南東から北西に走る溝があるが出土遺物はない。またピット等から出土した遺物は以下のとおりである。

その他の遺構出土遺物および表採遺物（第16図）

1は表採遺物で須恵器の蓋である。やや大形の器形で法量は推定口縁径23.7cmをはかる。天井部は水平で体部中位からやや内湾し、口縁部上位で下方に屈曲する。2は表採遺物で須恵器の蓋である。法量は推定口縁径14cmで、天井部中央に扁平なつまみがつく形態と考えられる。天井部が低平で口縁部にかけて屈折して、口縁端部は折りまげて口ばし状を呈する。天井部には回転ヘラケズリを施す。3は表採遺物の須恵器の杯である。法量は推定で口縁径13.5cm・高台径8.4cm・器高3.7cmである。器形は高台が低く外方に開き、体部は高台部から



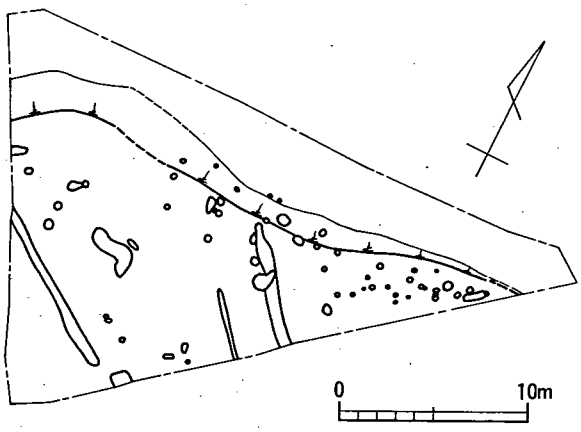
第16図　八ッ重遺跡東区西側出土遺物実測図（縮尺 1/3）

水平に伸びたのちに稜をつくって外上方に立ち上がる。口縁部下位に稜をもつ。調整は外面ヘラケズリ、内面ヨコナデで底部はヘラ切りである。4は表採遺物で須恵器の杯である。法量は推定で口縁径12.8cm・高台径8.8cm・器高4.5cmである。器形は高台が細く低くわずかに外方に開き、外縁部で接地する。体部は高台付け根部からわずかに内湾気味に外上方に立ち上がる。内外面ともナデ調整を施し、底部はヘラ切りである。5は表採遺物の須恵器である。杯かと考えられ、法量は底径約11cm前後である。底部は外縁部を小さく削って高台状に仕上げる。6は表採遺物で須恵器の壺かと考えられる頸部の破片である。最小径が6.1cm前後である。胴部上端から屈折して頸部がほぼ垂直に立ち上がり、中位以上で器厚を薄くしながらしだいに外反する。7は表採遺物で須恵器の壺の肩部破片である。胴部最大径部に3条以上の沈線をめぐらし、肩部やや下位に4条からなる櫛描波状文を施す。頸部との境がくの字に外反する。8は6号ピットより出土した須恵器の壺または瓶の底部破片である。底径推定11.7cmで、底部は器厚が比較的薄く平底をなし、ヘラ切りである。外面はヘラケズリの後にナデ調整を施す。9は表採遺物で須恵器の壺または瓶の破片である。法量は高台径推定12.9cmである。高台は器形の大きさに比べて小さく低く、畳付部は外縁部で接地する。内外面ともにヘラケズリを施し、外面についてはさらにナデ調整を施す。

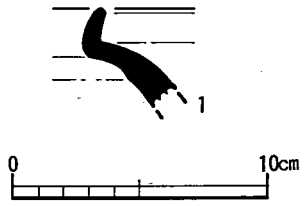
4．八ッ重遺跡西区東側の調査

八ッ重遺跡西区東側は本来水田であったが、現在はイチゴ等を栽培する畑地となっている。発掘調査区は南西辺で路線幅いっぱいに取り、南東辺を水路に並行させ、北辺は自然地形の段落ちを確認できる範囲まで広げて、幅30m・長さ22mの全体として三角形の区画となった。

遺構面は段落ち上面で現表土から20cm程度さがる標高34m前後である。検出した遺構は溝



第17図　八ッ重遺跡西区東側全体図（縮尺 1/400）



第18図　八ッ重遺跡西区東側出土遺物実測図（縮尺 1/3）

3条の他は60基程度のピットである。しかし溝はすべて近年の水田経営にともなう比較的新しいものである（第17図）。

調査区北辺に沿って確認した段落ちは自然地形であり、試掘調査の結果、これと八ッ重遺跡西区西側との間が50cm～100cm程度低くなっておりかつての自然河川であったことが判明した。川幅は約75m に達し比較的大きなものである。調査区の西端と東端とでほとんど比高差はないが現地形から考えて、流水の方向は西から東と推定される。またこの河川は音無川のかっての一支流で、西端に位置するものであると考えられる。

表採遺物（第18図）

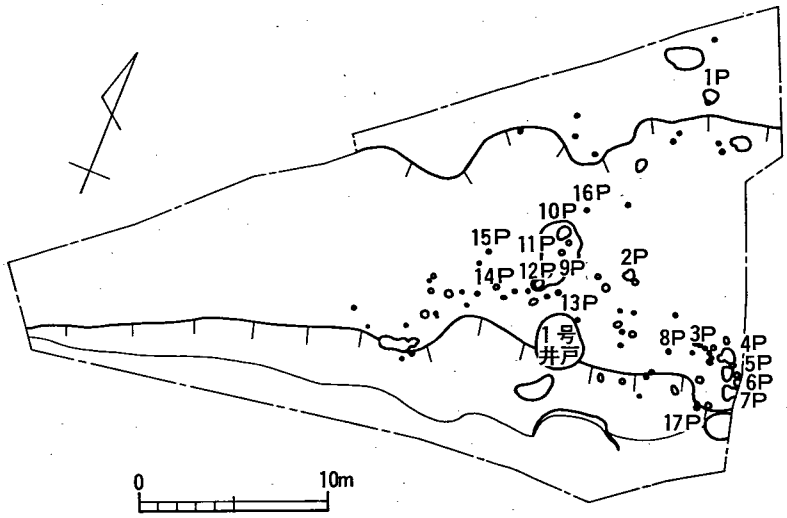
遺物は少なく表土の剝土作業中に弥生土器・須恵器の小片を表採した。

1は須恵器の直口壺の口縁部から胴部上位にかけての破片である。器形は球形の胴部にわずかに外反する小さな直口の口縁部がつく。

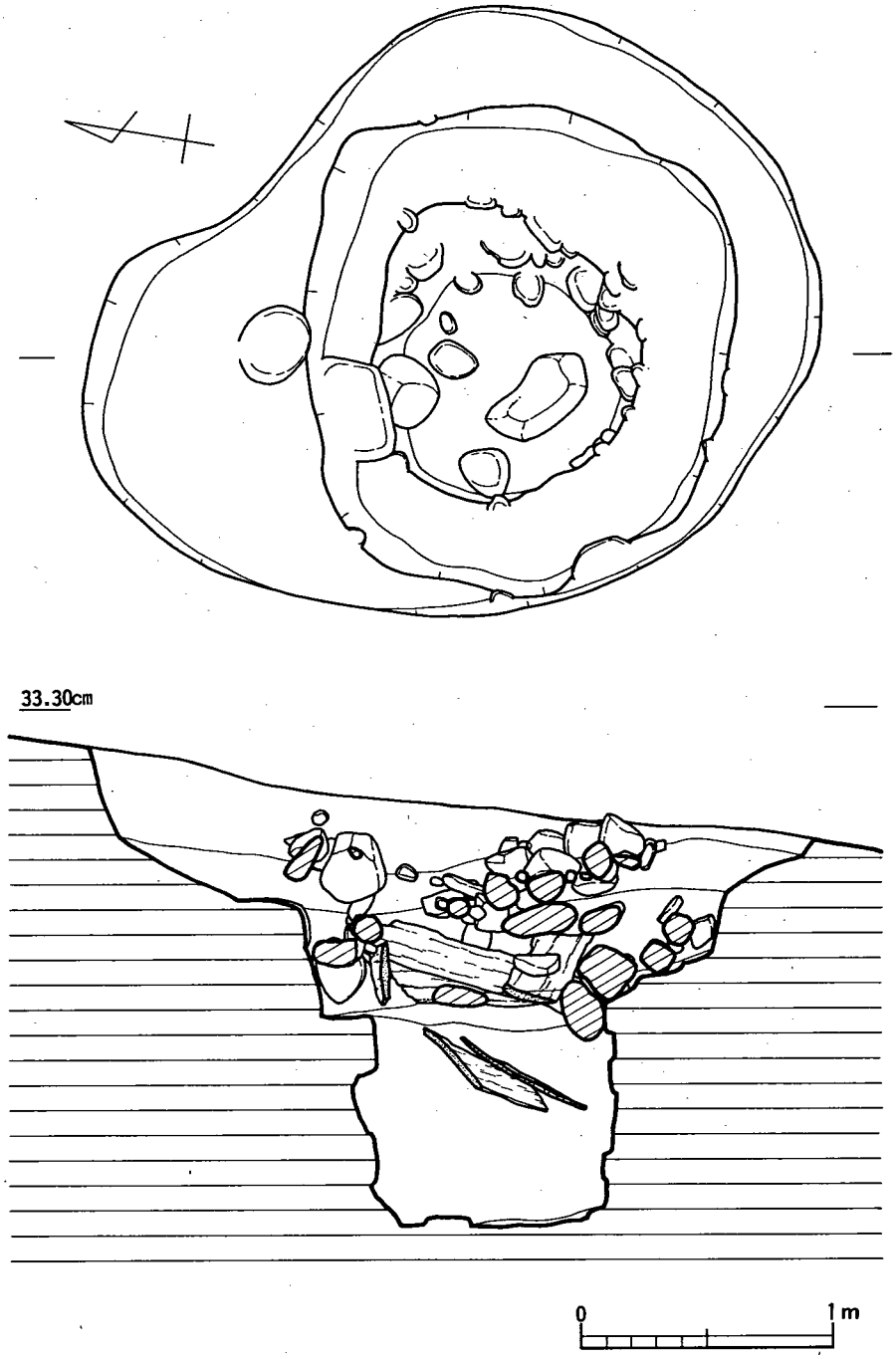
5．八ッ重遺跡西区西側の調査

八ッ重遺跡西区西側は現況では西区東側から一連の畑地となっている。発掘調査区は北東辺を路線幅いっぱいに取り、北西辺が町道の法面まで、南辺が自然地形段落ちの底面まで広げた。幅41m・長さ26m の三角形の区画をなす（第19図）。

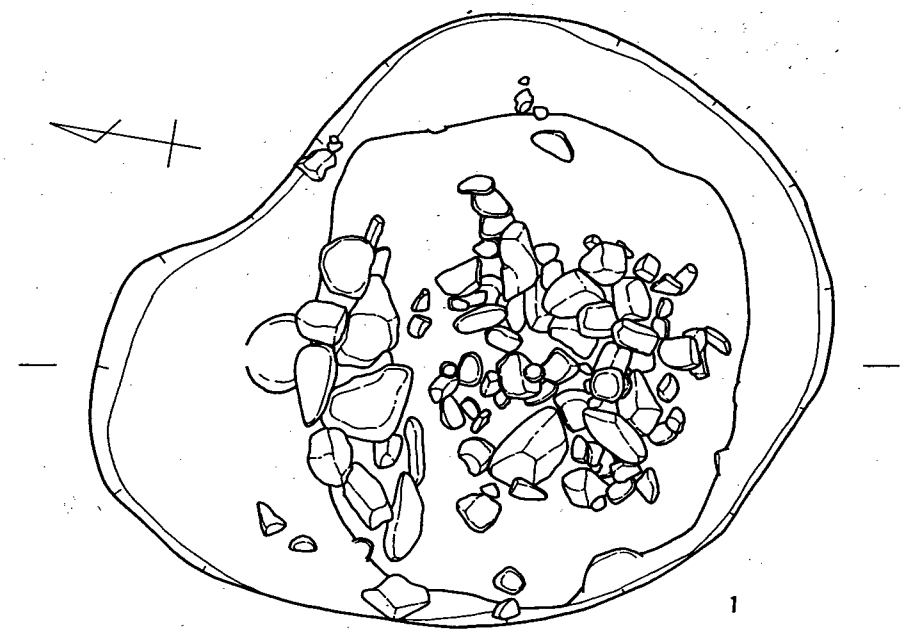
遺構は井戸1基を除くとすべてピットで総数約90基である。なお井戸の東側に接して平面的には円形に配されたピット群があるが、上位のピットと下位のピットとでは検出面で55cm程度の比高差があり円形竪穴住居跡とは考えにくい。

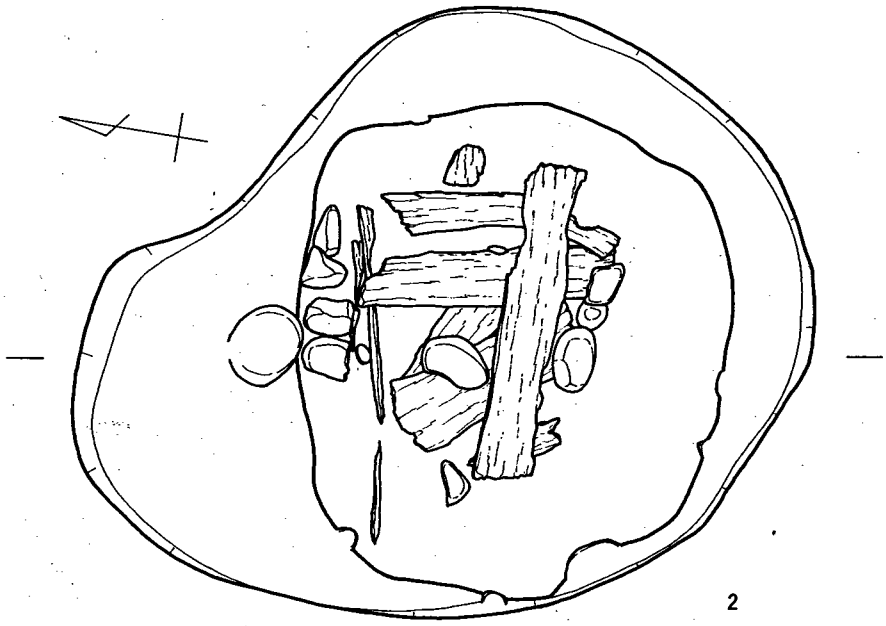


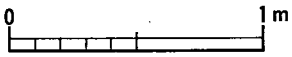
第19図　八ッ重遺跡西区西側全体図（縮尺 1/400）



第20図　八ッ重遺跡西区西側１号井戸実測図１（縮尺 1/30）







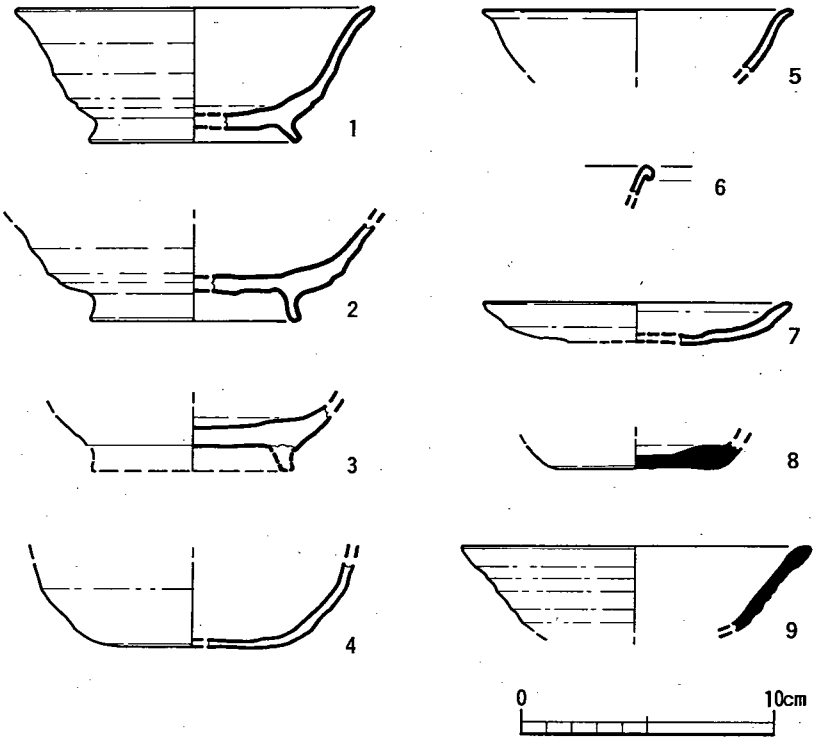
第21図　八ッ重遺跡西区西側１号井戸実測図２（縮尺 1/30）

（1）井戸（第20図・第21図）

調査区中央部の斜面のやや下位で1号井戸を検出した。

遺構検出面での平面形態は北西－南東方向に長いいびつな楕円形をなし、長さ300cm・幅230cmで、標高は33.20m である。検出面から40cm下がった位置にやや平坦な面（上段）をつくり出し、そこから基本的に方形の平面形の竪穴となる。この部分では東西長さ196cm・南北幅170cmである。さらに40cm下がった中段にもう一つ小さい平坦面をつくり、その下位は底部までほぼ垂直に掘り込む。全体の深さは検出面から190cmである。地山は上段より上では赤褐色の均質の土層であるが、中段以下になると洪積台地特有の礫を多量に含むようになる。

井戸内部の堆積状況はまず検出面から深さ30cm～70cmの中段付近までは黒色の弱粘質土とともに多量の礫が埋没する。礫はすべて径40cm以下で、大部分が10cm～20cm前後の花崗岩系円礫である。つぎに深さ70cm～100cmの間には上記の礫に混じって、板状の木製品が出土するようになる。この木製品は基本的に4枚あり、北側の1枚は井戸北辺に並行して東西方向に立った状態であり、長さ134cm・幅24cm、東辺に沿って南北方向に並んだ2枚は東側が長さ96cm・幅19cm、西側が長さ102cm・幅25cmをはかる。また南辺に沿ったものは東辺の2枚に折り重なるように出土し、長さ135cm・幅26cmである。以上4枚の下位では礫がほとんどなくなる



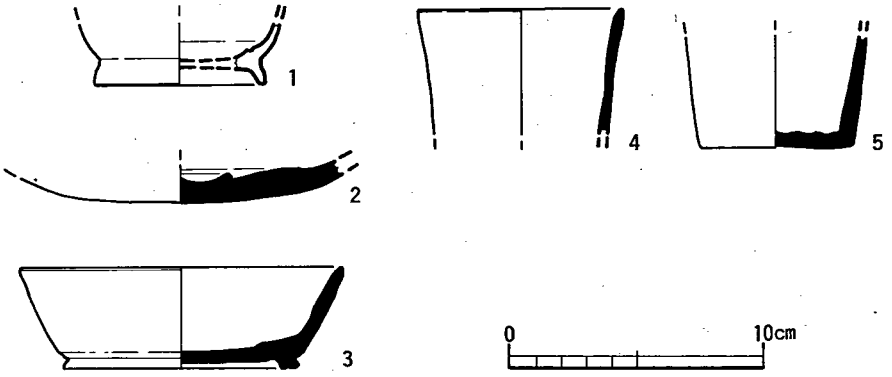
第22図　八ッ重遺跡西区西側1号井戸出土遺物実測図（縮尺 1/3）

が、暗灰色粘質土層の中にさらに２枚の板状木製品が出土した。２枚とも井戸中央部に落ち込んだ状態で出土し、上位のものは長さ85cm・幅31cm、下位のものは長さ80cm・幅21cmである。以上６枚の木製品はその形状および出土状態から考えて、井戸枠を構成する板材と考えられる。板材の組み方は不明であるが礫を含めた出土状態からみて、この１号井戸の規模を復元すると、東西長約110cm前後・南北幅約90cm前後の内法の、やや長方形の平面形態をなしたと考えられる。

１号井戸出土遺物（第22図）

井戸内埋土からは多量の土師器・須恵器が出土した。出土層位は大部分板材および礫層の間で、中段以上である。

１は土師器の椀である。法量は推定で口縁径14.2cm・高台径8.3cm・器高5.4cmである。器形は高台が細く外方に開く。底部はほぼ平底で、体部が下位で外上方に屈曲したのち直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。底部回転ヘラ切りで、他の部分はナデによる表面調整を施す。２は土師器の椀で、法量が推定で高台径8.2cmである。高台はやや細く、高く、垂直気味で端部が小さく開く。底部は水平で、体部は下位で外上方に屈曲したのち直線的に立ち上がる。底部回転ヘラ切り、表面調整はナデである。３は土師器の椀である。高台が付け根部から破損するが、接合面には４条の沈線状の条線をめぐらす。４は土師器の椀である。平底気味の底部から、体部は内湾して立ち上がり、中位では直立気味になる。体部内面にはヨコ方向のミガキを施す。全体的に器厚が薄い。５は土師器の椀で、推定口縁径12.3cmである。やや丸味をもった体部で、口縁部が小さく外反する。６は土師器の椀かと推定される口縁部の小破片である。口縁端部を外下方に小さく折り曲げている。７は土師器の皿である。法量は推定口縁径12.3cm・器高1.6cmである。底部がやや丸底気味で、体部上位から口縁端部にかけて屈曲して外反する。器厚は底部より口縁部の方が厚い。８は須恵器の杯と考えられ



第23図　八ッ重遺跡西区西側出土遺物実測図（縮尺 1/3）

る底部の破片である。推定底径7.0cm。9は須恵器の口縁部の破片で杯かと考えられる。法量は推定口縁径13.8cm。直線的に開く体部にやや丸底気味の底部がつく器形か。調整は外面ヘラケズリ、内面ヨコナデである。

（2）その他の遺構と遺物

八ッ重遺跡西区東側と本調査区の間には西から東に旧河川が流れていたことは先述したが、本調査区でもこの河川の肩部の線と底面を確認した。両者の比高差は西区東側の右岸では75cmであったが、左岸では170cm前後と高くなっている。また1号井戸以外には顕著な遺構はみられない。

その他の遺構出土遺物および表採遺物（第23図）

遺物は須恵器・土師器が多くみられ、弥生土器片も少量出土した。

1は3号ピットから出土した椀で、須恵質の焼成である。法量は推定高台径6.8cmで器形は高台がやや低くわずかに外方に開く。体部は内湾しながら直立気味に立ち上がる。やや小形のものである。2は5号ピットから出土した須恵器の蓋である。つまみ部は径3.9cmで大形で扁平な形態をなし、器形は全体的に外縁部が上方に反っている。3は表採遺物で須恵器の杯である。法量は推定で口縁径12.9cm・高台径9.4cm・器高4.0cmである。高台は低く外反し、畳付部が水平をなす。底部は平底で下部は高台付け根部から屈曲して外上方へ直線的に立ち上がる。底部回転ヘラ切りで、他の部分はヨコナデによる表面調整を施す。4は17号ピットから出土した須恵器で、壺か瓶の口縁部の破片である。推定口縁径8.1cm。わずかに外反しながら立ち上がり、器厚は薄い。5は6号ピットから出土した須恵器で器種は不明である。底径6.0cm。水平な底部にほぼ垂直に立ち上がる体部がつく。器厚は全体的に薄手である。底部回転ヘラ切り、他の部分はヨコナデ調整を施すが、体部外面下位にヨコ方向のヘラケズリ痕が残る。

6．小　結

八ッ重遺跡東区東側

顕著な遺構はみられなかったが、調査区北東部で確認した小谷は比較的まとまった遺物が出土し、またほぼ単一の土層をなすことなどから時期的には平安時代以前にこの付近でこの小谷を埋めつくすような土木事業が行なわれたことが推測される。

八ッ重遺跡東区西側

円形に柱穴を配置した3棟の住居跡はまったく遺物が出土しなかったため時期の決定はできないが、竪穴住居跡と考えるならば、調査区周辺から縄文時代の遺物は出土せずかつ弥生

時代中期の土器が採集されていることから、弥生時代に属すると推定される。また弥生時代後期にはこの地域では円形竪穴住居跡はほとんど存在しない（註１）ことから前期～中期の所産であろう。２基の土壙については平面形態や礫を有する特徴からほぼ同じ時期に属すると考えられるが、出土遺物がなくその時期および遺構の性格については決定できない。

八ッ重遺跡西区西側

１号井戸は礫層中からセットで出土した土師器の椀や皿からみて、時期的には９世紀後半から10世紀初頭の所産と考えられる。

八ッ重遺跡全体を通じて考えられるいくつかの問題点を以下にあげてみる。

第一に、弥生時代前期から中期に属すると考えられる東区西側の３棟の住居跡については、距離的に最も近い当時の水稲生産地が西方を流れる祓川の沖積地であることを想定するならば、約800m と離れており水稲耕作に専従した人々の集落の一部をなすものかどうか問題が残る。他の生産活動に従事した可能性も考慮する必要がある。

第二に、古墳時代には祓川右岸段丘上面には小円墳が散在し、現在でも「四十塚」「塚ハタ」「大塚」「一ッ塚」等の字名が残っていて、６～７世紀には相当数の古墳が営まれていたと考えられる。しかしこれらの古墳を築造した人々の集落の位置についてはいまだ不明で、祓川左岸沖積地の大字国作・惣社地区で７世紀後半代の大規模集落が確認されている（註２）にとどまる。６世紀代の集落の位置については今後の課題であろう。

第三に、古代の官道については西区西側の北西約250m の地点にある呰見薬師堂の南隣の小路がその一部と考えられ、この八ッ重遺跡内を北西―南東方向に通過していたと想定される（註３）が、今回の調査では道路状の遺構等は確認されなかった。これは調査担当者の力量不足に責がある。

第四に、『和名類聚抄』に記録される「呰見」郷の問題である。西区西側で検出された１号井戸は時期的にも、上書が編纂された平安時代中期の930年代に近い９世紀後半から10世紀初頭に属し、この「呰見」郷の人々の生活の一部を構成していた可能性は十分ある。またこの井戸の利用者の居住場所については、東側の現在水田になっている場所は東区東側の小谷で営まれた土木工事の問題から考えて、当時すでに水田として開墾されていたことも想定され、むしろ北西約250m に散在する現在の集落付近がやや微高地でもあり居住に適するのではないだろうか。

先述したように八ッ重遺跡周辺は古墳群や弥生時代から古墳時代にかけての遺物散布地がわずかに残るが、比較的遺跡が乏しくさらに1968年のほ場整備事業で壊滅的な打撃を受けた地域であると従来考えられてきた。確かに東区東側と東区西側との間のような旧地形の小丘陵尾根相当部は開墾やほ場整備事業で削られているが、小丘陵裾部や谷部には現在でも水田下に弥生時代から平安時代にかけての遺構が眠っていることが今回の調査で判明した。

(註)

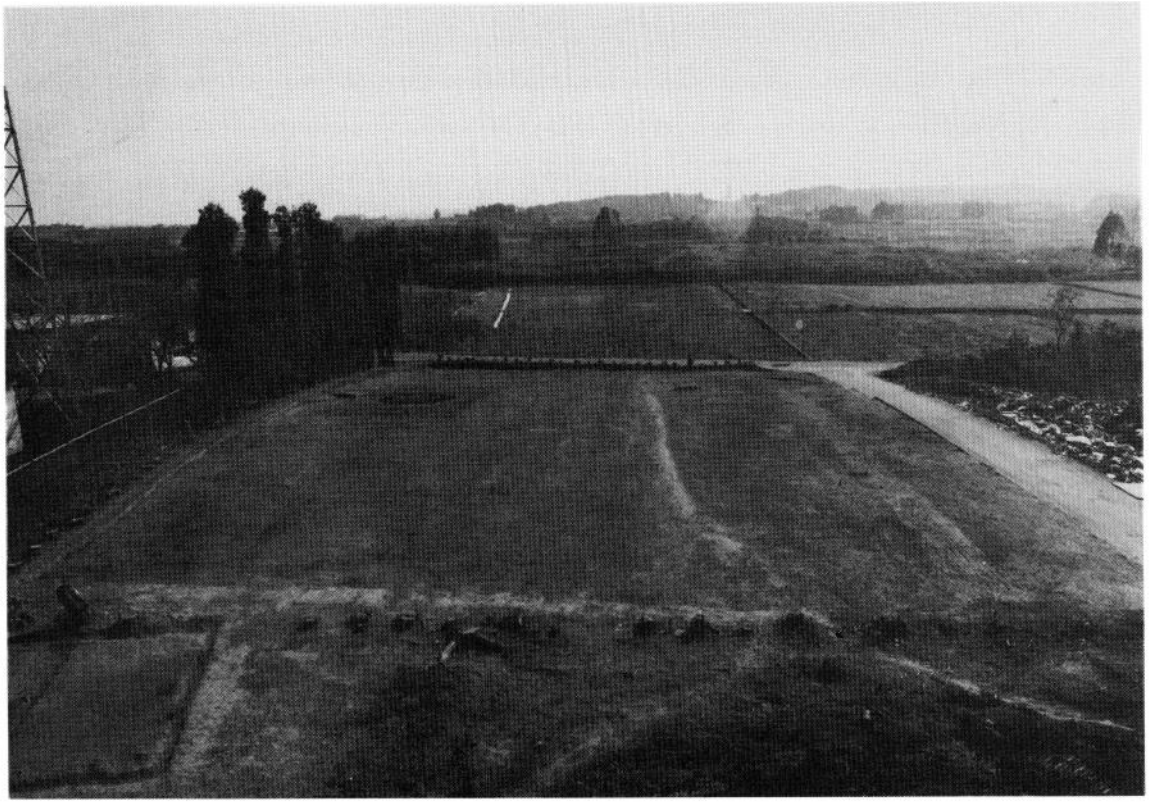
1．行橋市下稗田遺跡では250棟におよぶ弥生時代前期から後期の住居跡が確認された。このうち、弥生時代後期から古墳時代初頭に属する住居跡は80棟あるが、円形住居跡は1棟のみであった。

2．石松好雄編「豊前国府」豊津町文化財調査報告書第4集，1986
末永弥義編「豊前国府」豊津町文化財調査報告書第8集，1989

3．日野尚志「豊前国京都・仲津・築城・上毛四郡における条理について」佐賀大学教育学部研究論文集第22集，1974

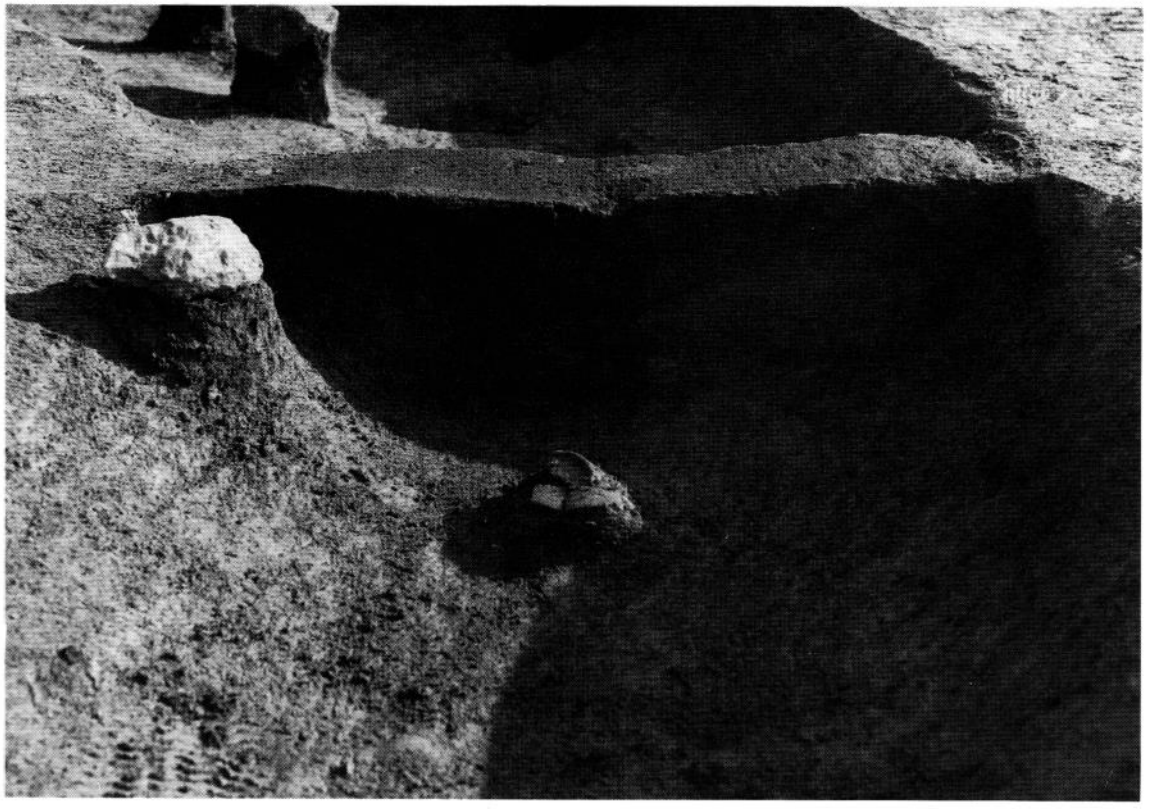
図　　版

（1）弓田遺跡東区全景（東より）

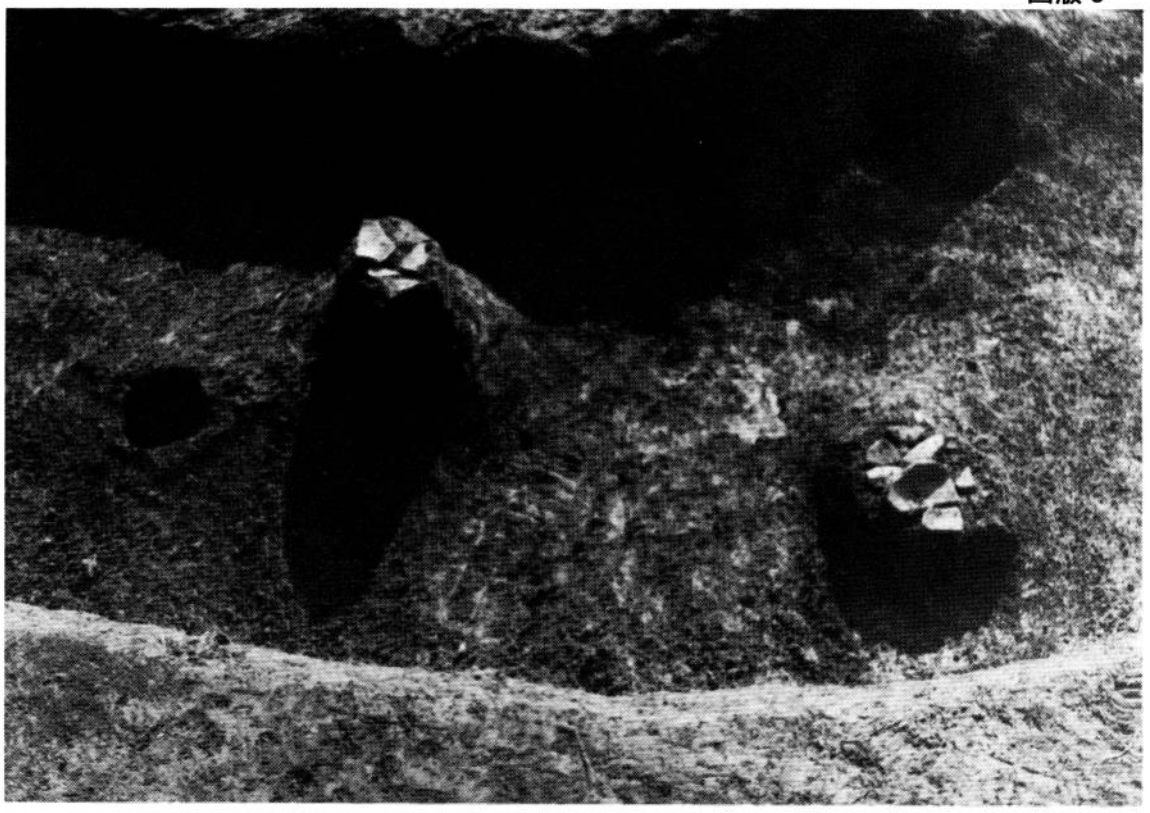


（2）弓田遺跡東区全景（西より）

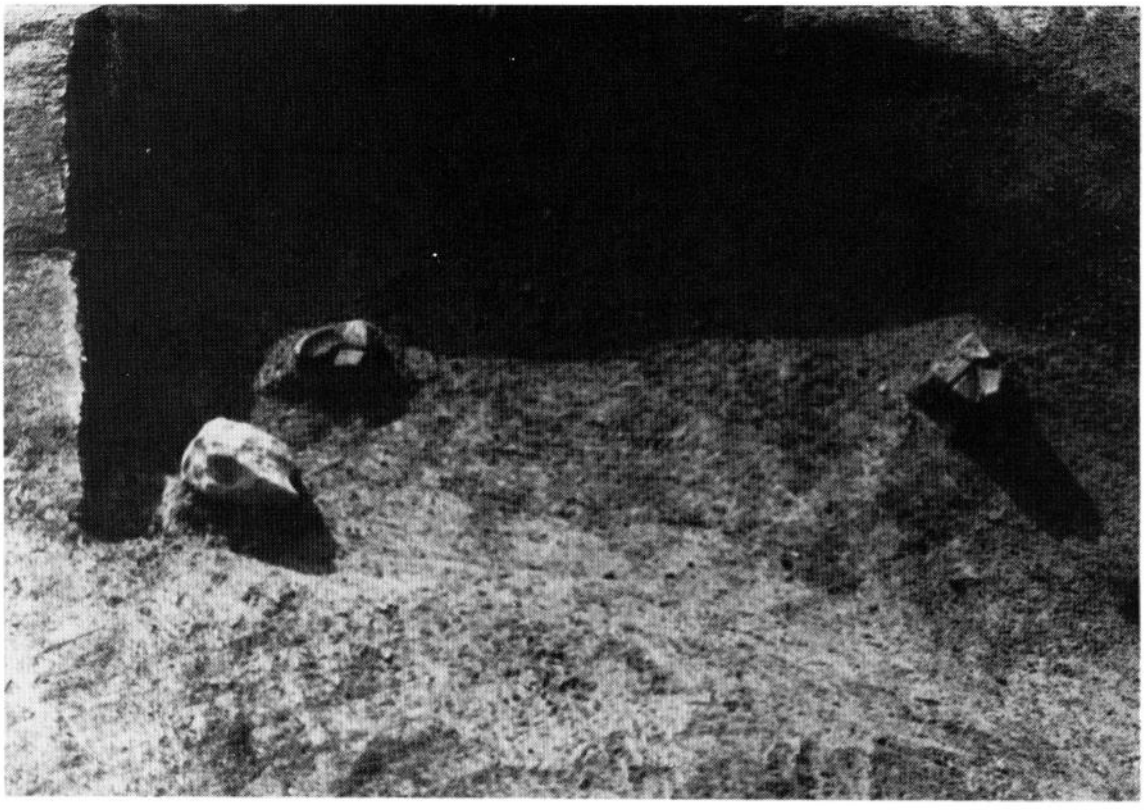
（1）弓田遺跡東区１号円形周溝状遺構（東より）



（2）弓田遺跡東区１号円形周溝状遺構土層断面

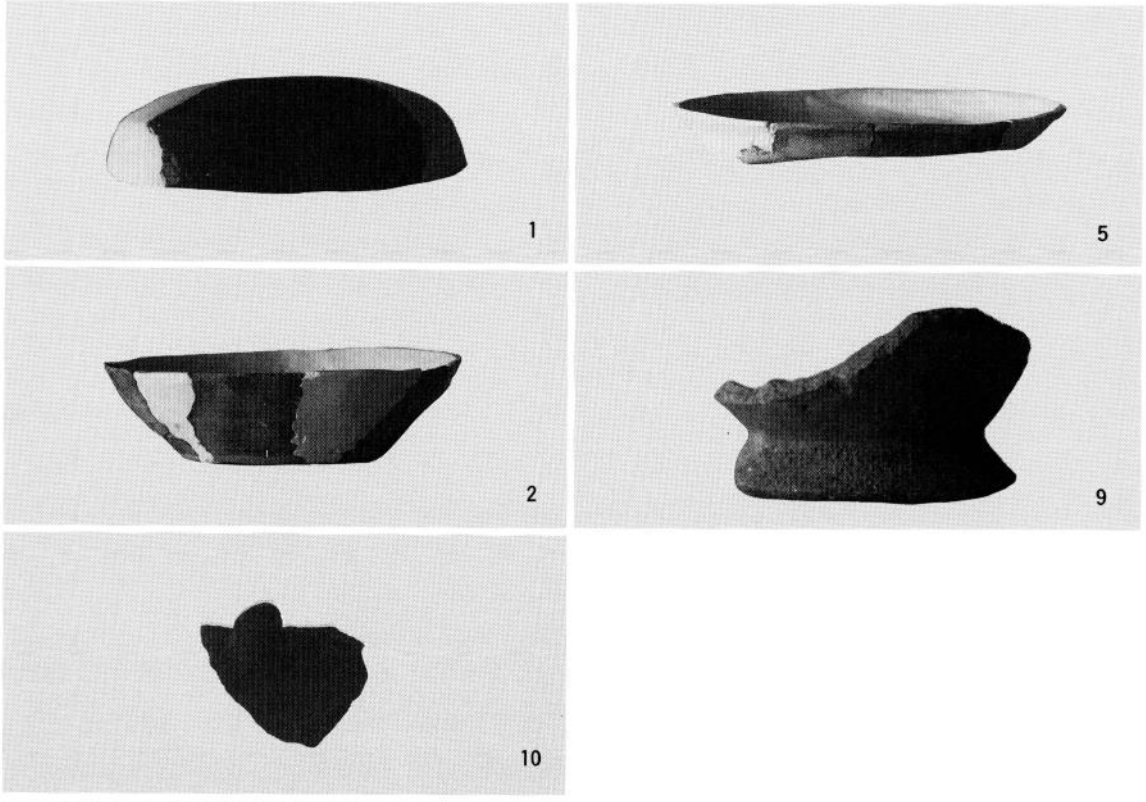


（1）弓田遺跡東区 1 号円形周溝状遺構土器出土状況 1

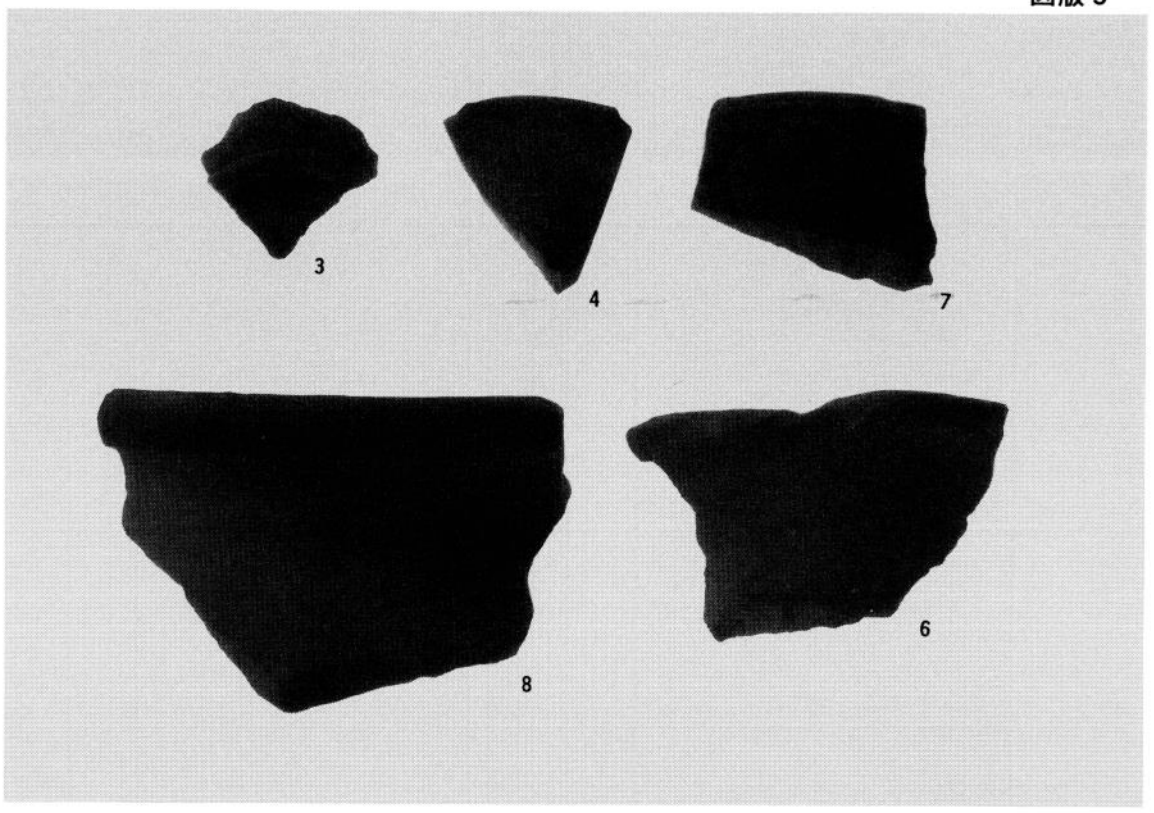


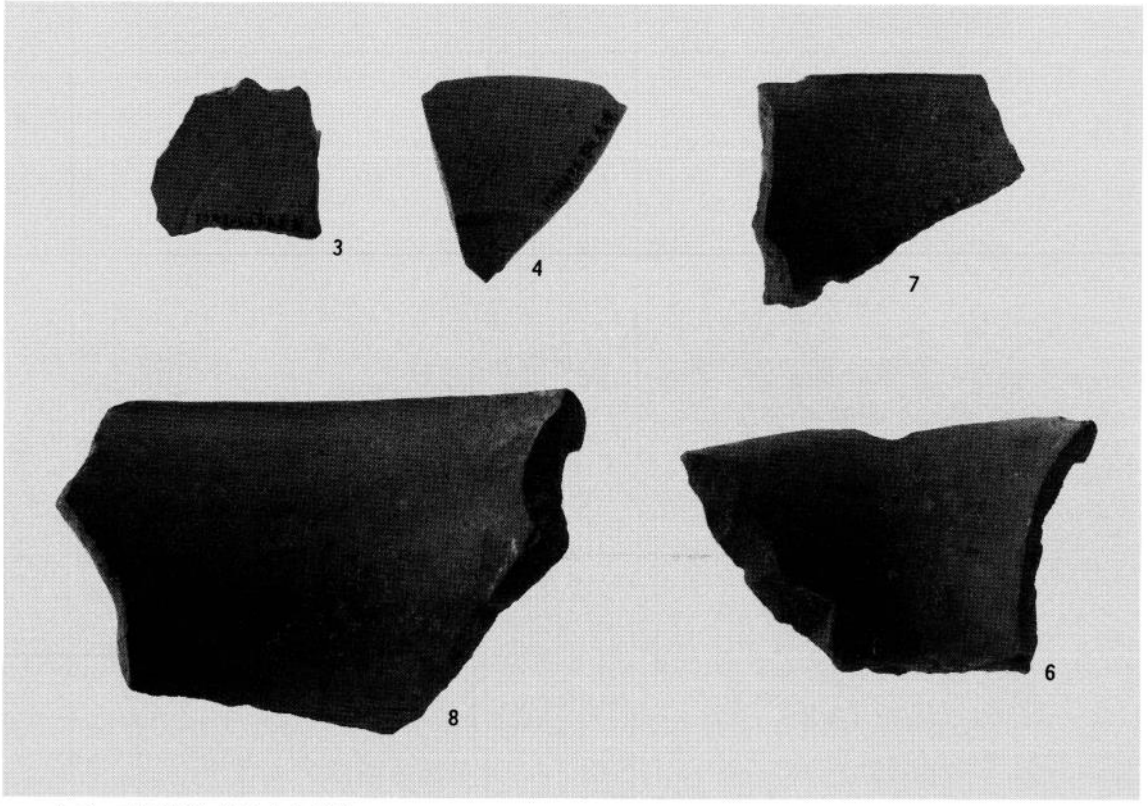
（2）弓田遺跡東区 1 号円形周溝状遺構土器出土状況 2

（1）弓田遺跡東区 1 号溝（南より）



（2）弓田遺跡東区出土遺物 1

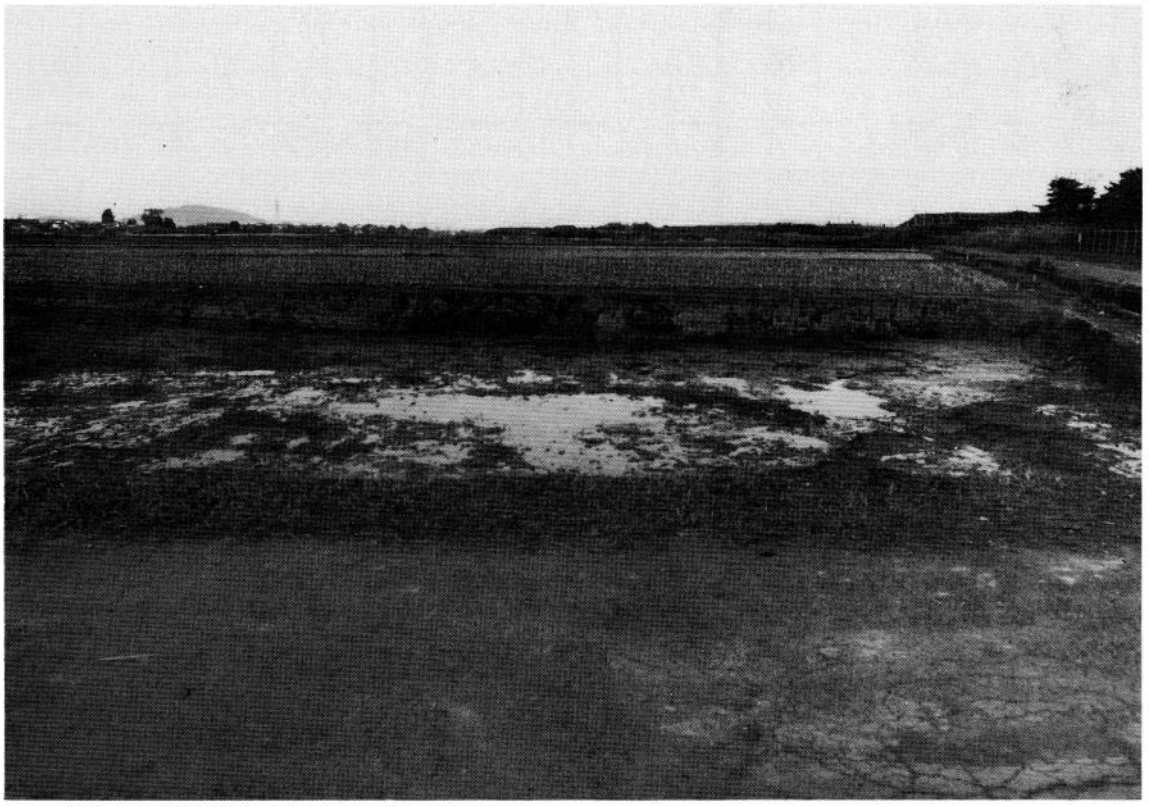




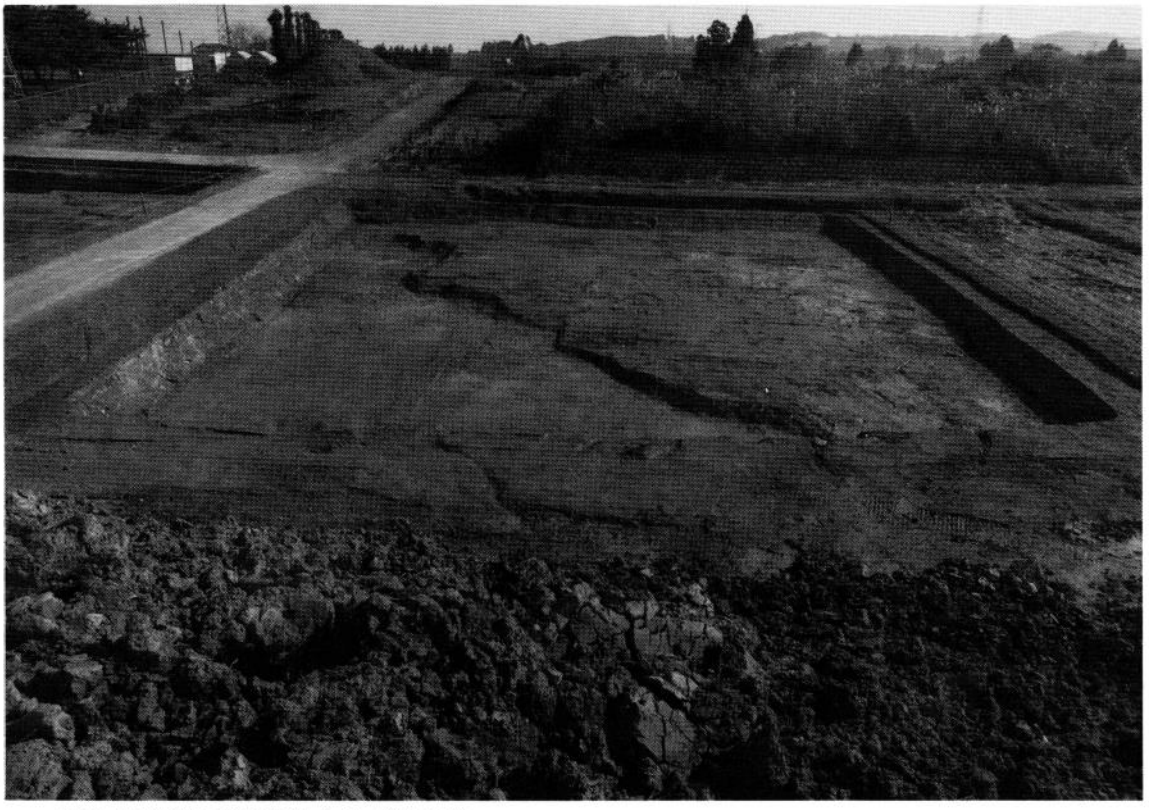
（1）弓田遺跡東区出土遺物 2

（1）弓田遺跡西区北半全景（東より）

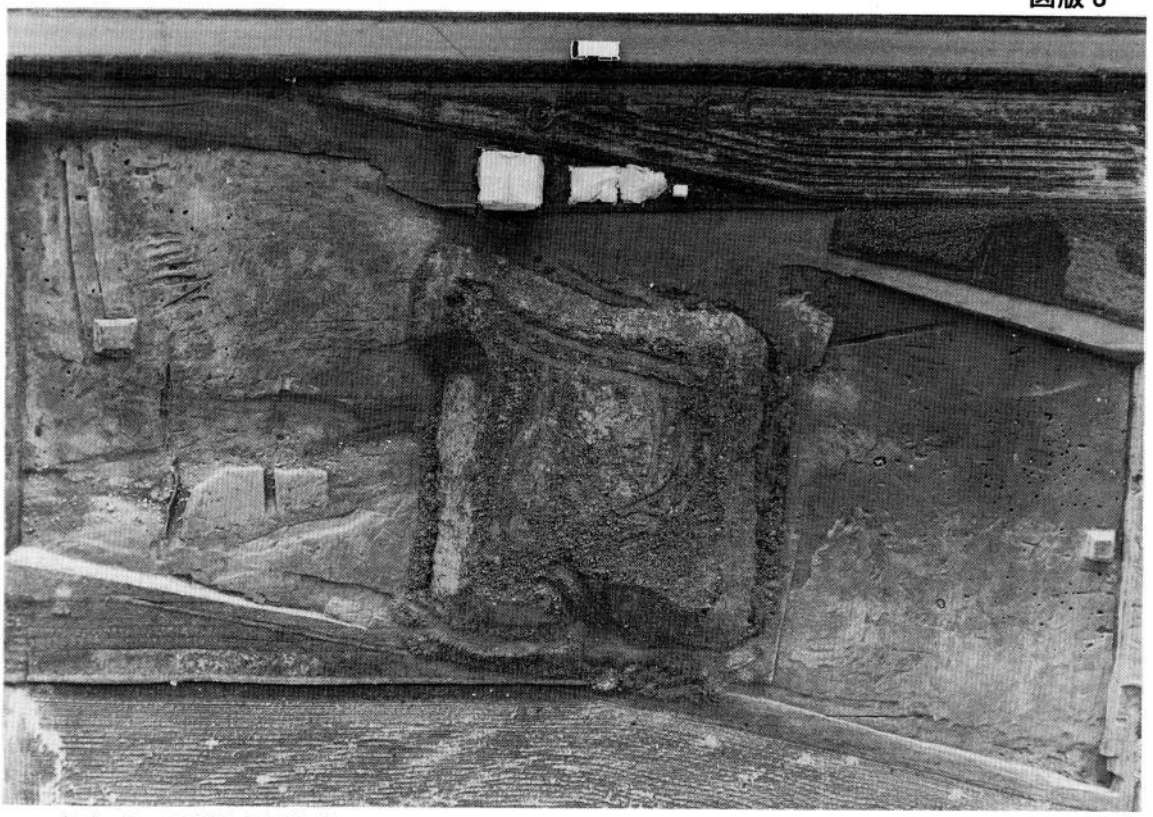
（2）弓田遺跡西区北半全景（西より）



（1）弓田遺跡西区北半自然河川内堆積状況



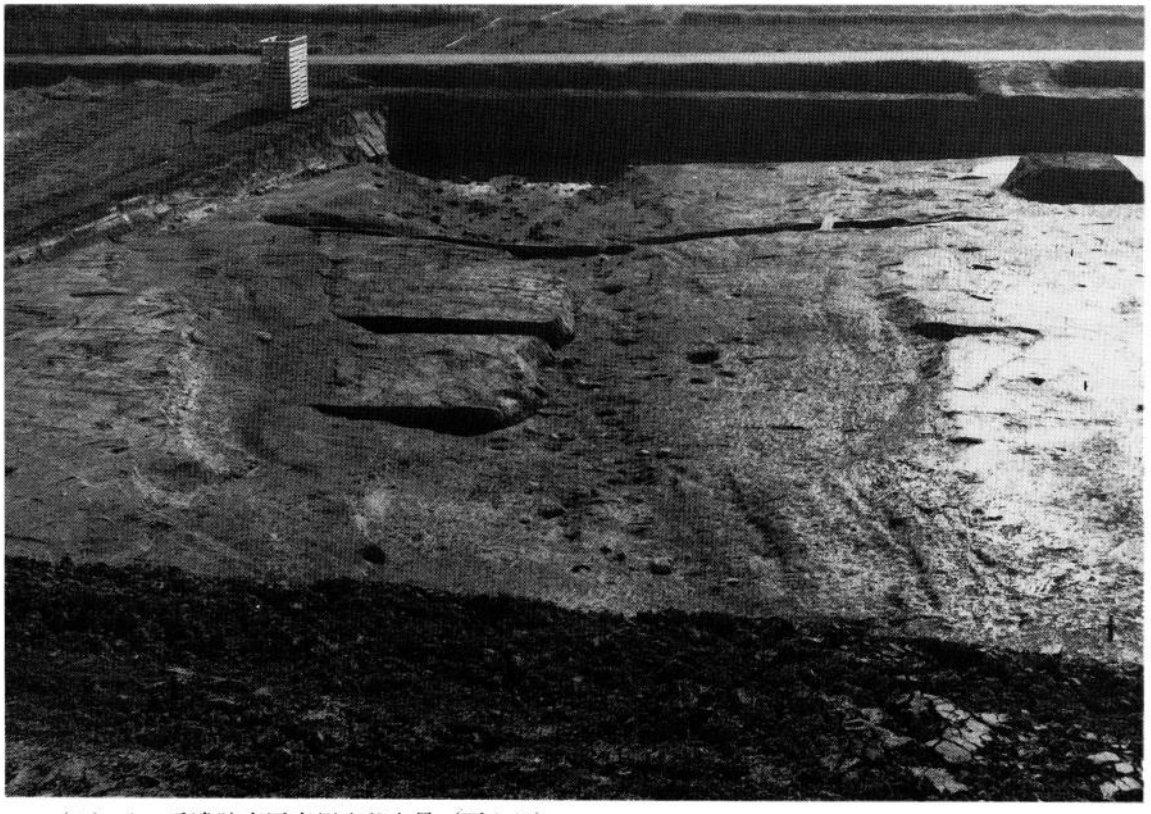
（2）弓田遺跡西区南半全景（西より）



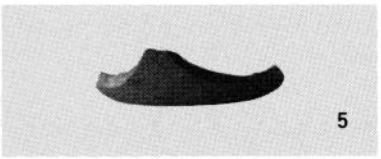
（1）八ッ重遺跡東区全景

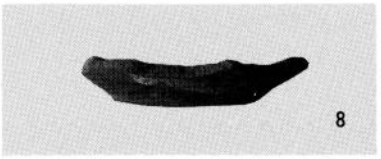
（2）八ッ重遺跡東区東側全景

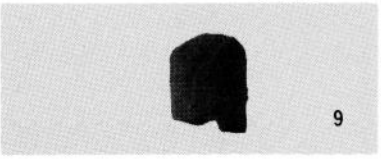
（1）八ッ重遺跡東区東側小谷・1号溝検出状況

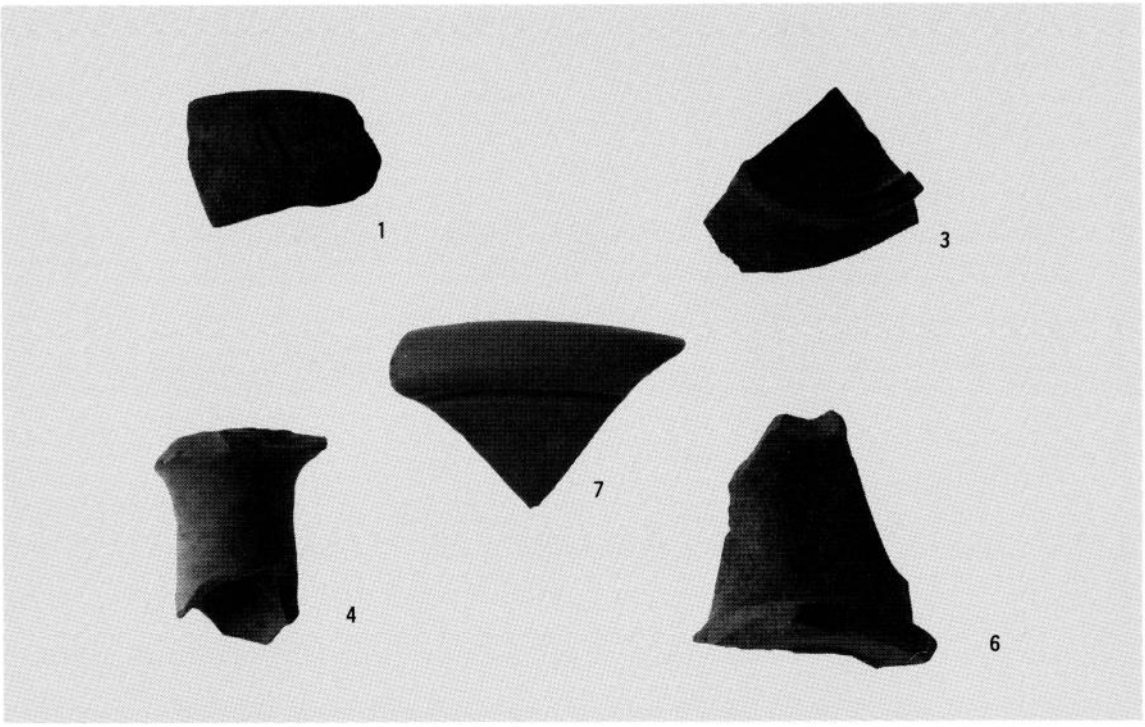


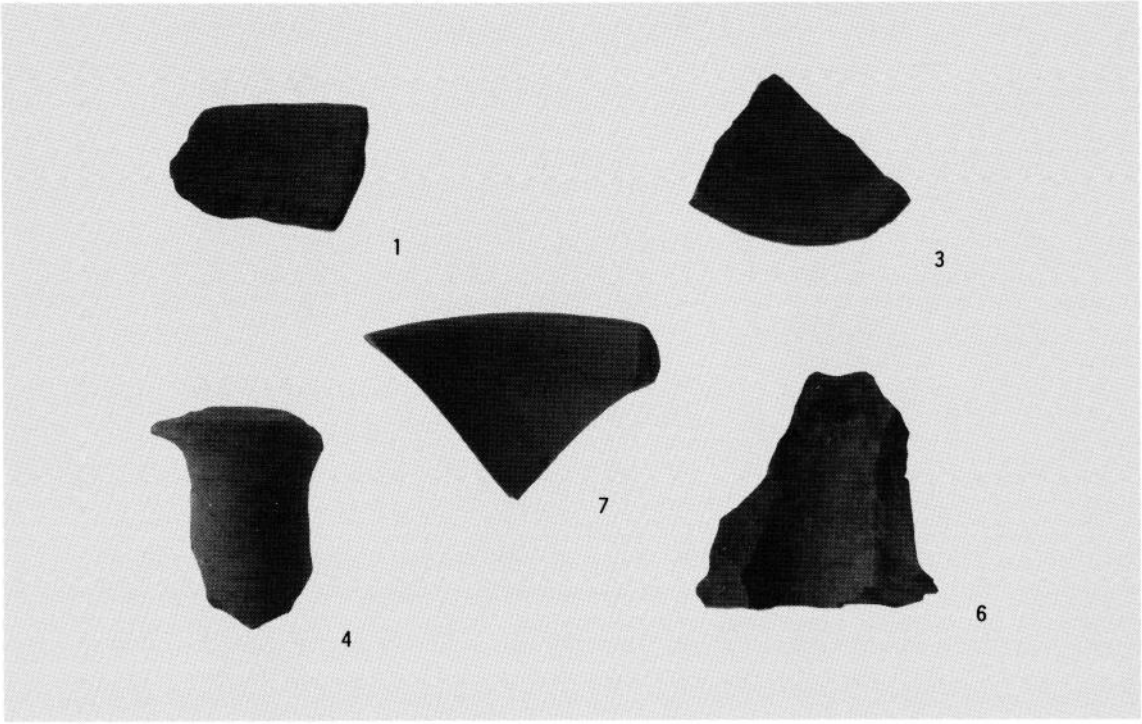
（2）八ッ重遺跡東区東側小谷全景（西より）





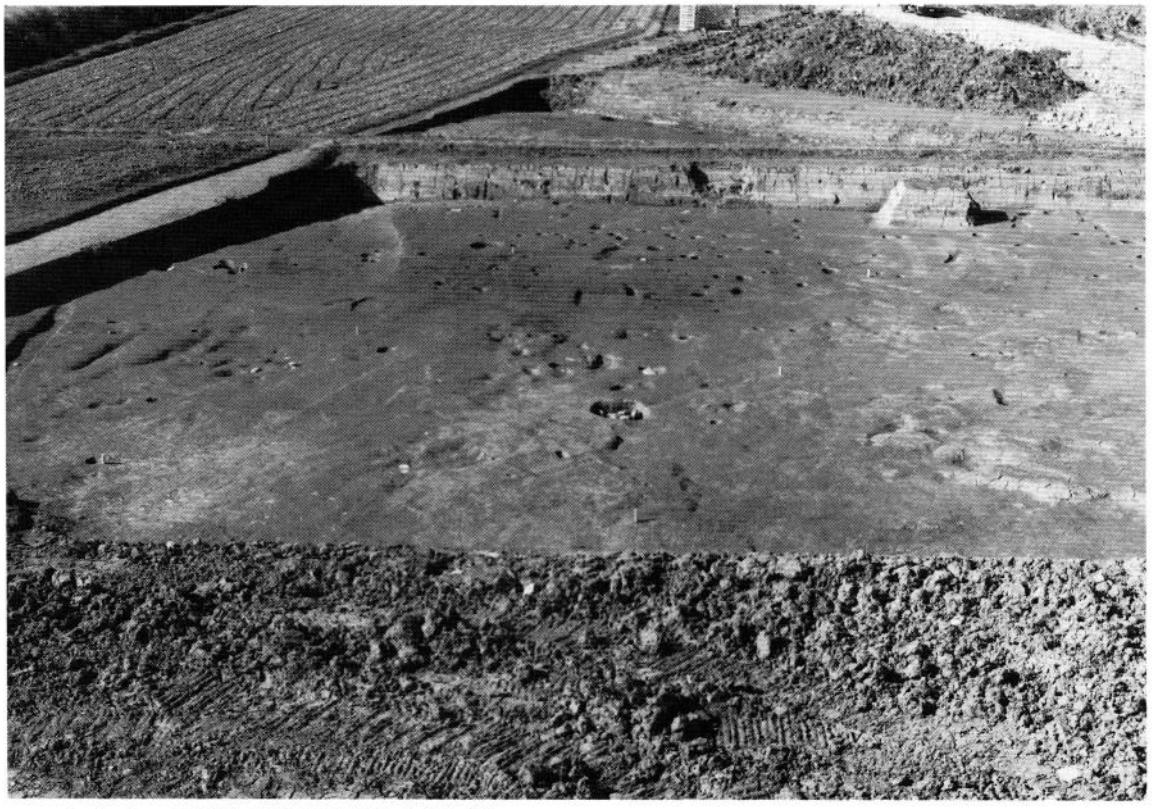






（1）八ッ重遺跡東区東側出土遺物

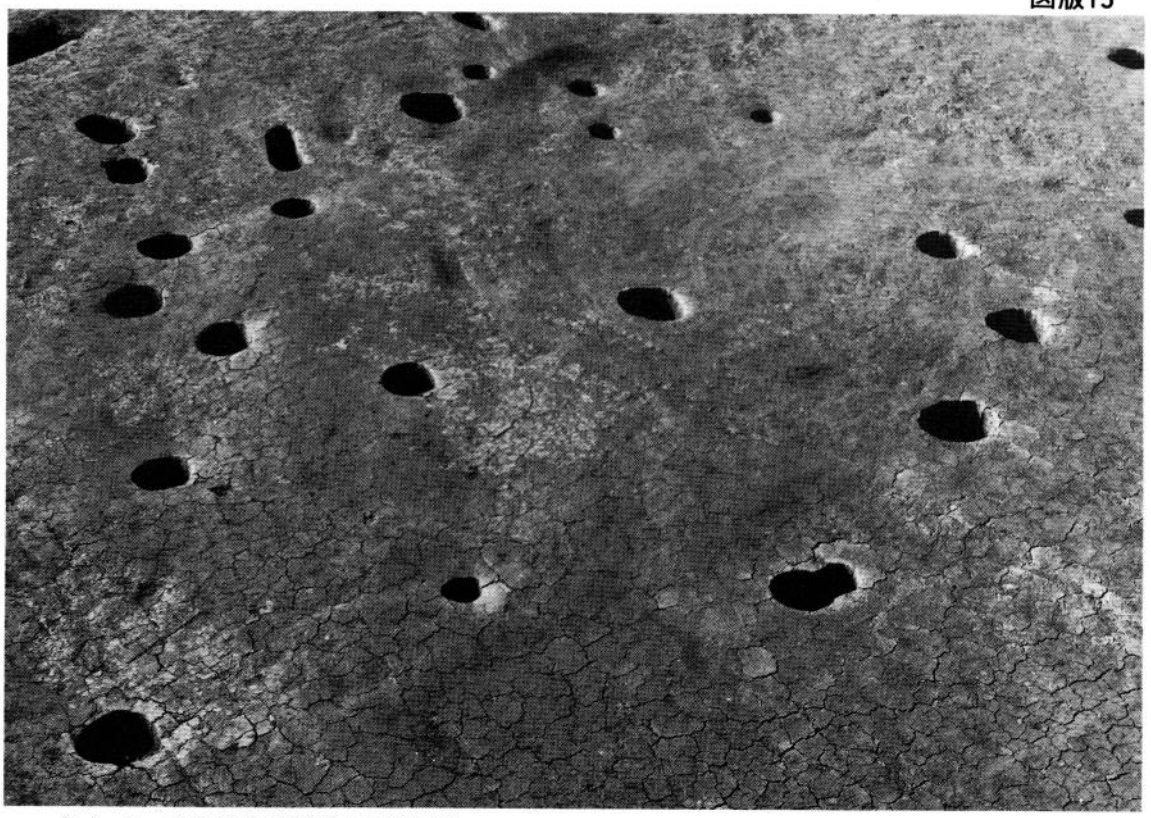
（1）八ッ重遺跡東区西側全景



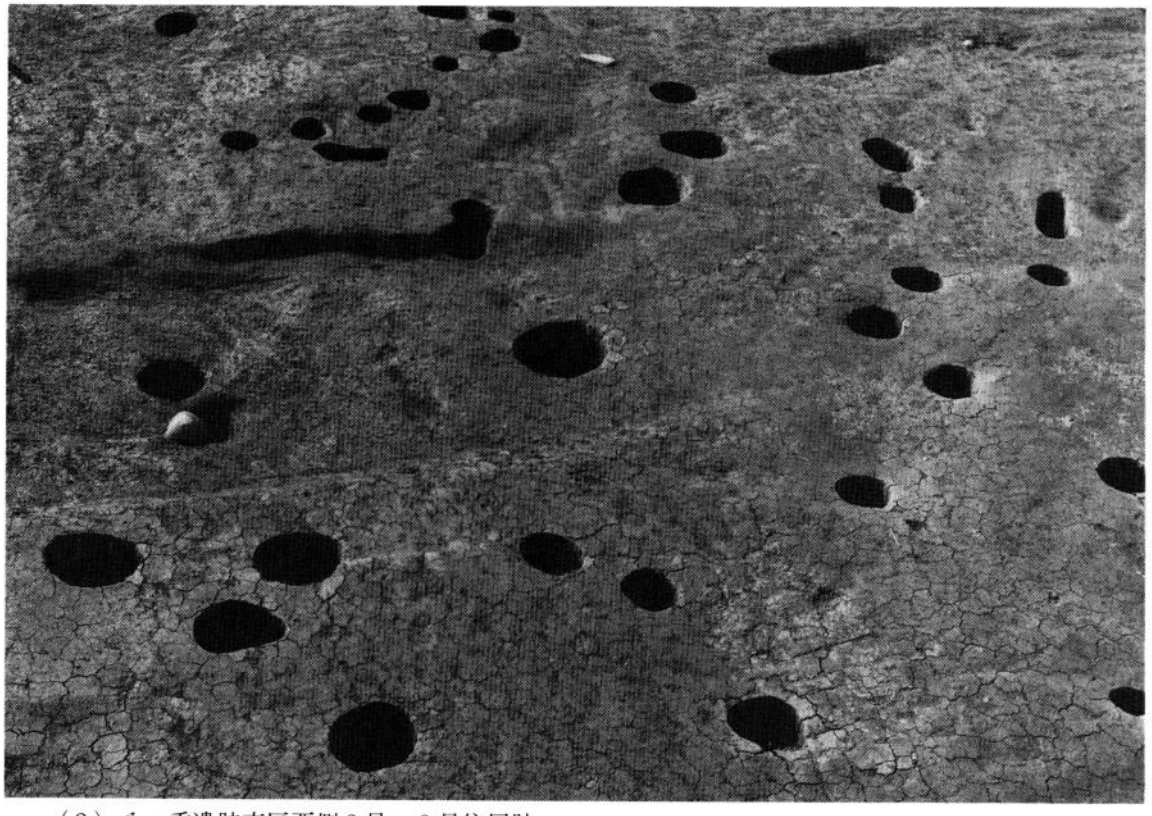
（2）八ッ重遺跡東区西側南半（東より）

（1）八ッ重遺跡東区西側柱穴群検出状況

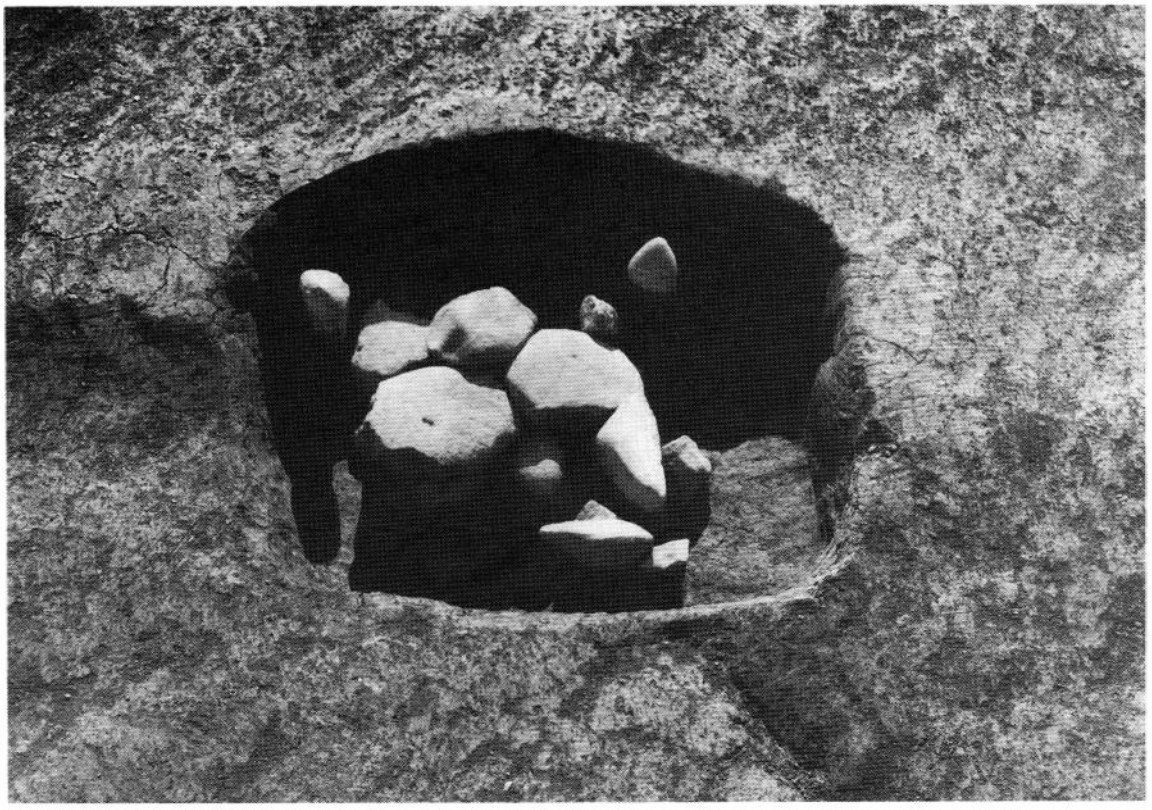
（2）八ッ重遺跡東区西側1号～3号住居跡（東より）



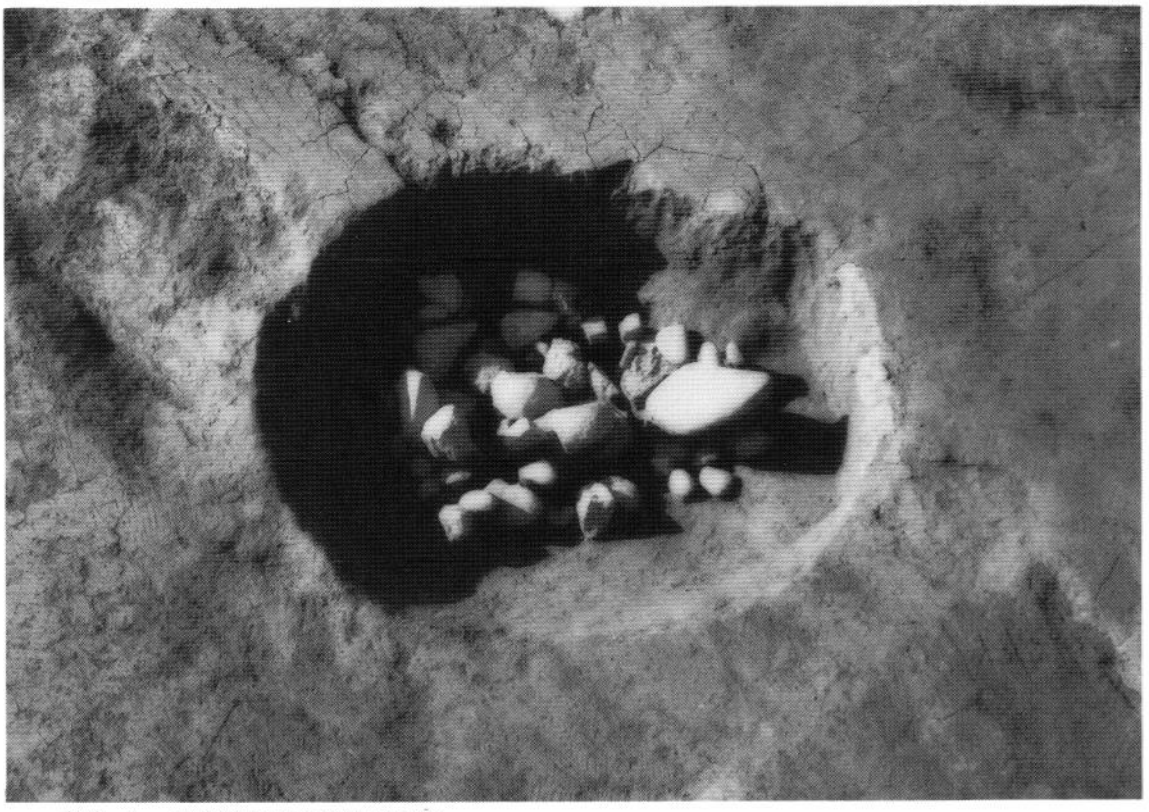
（1）八ッ重遺跡東区西側１号住居跡



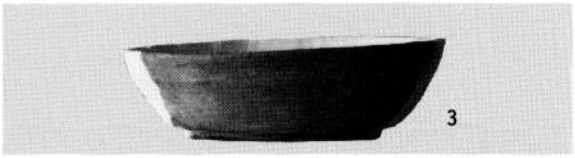
（2）八ッ重遺跡東区西側２号・３号住居跡

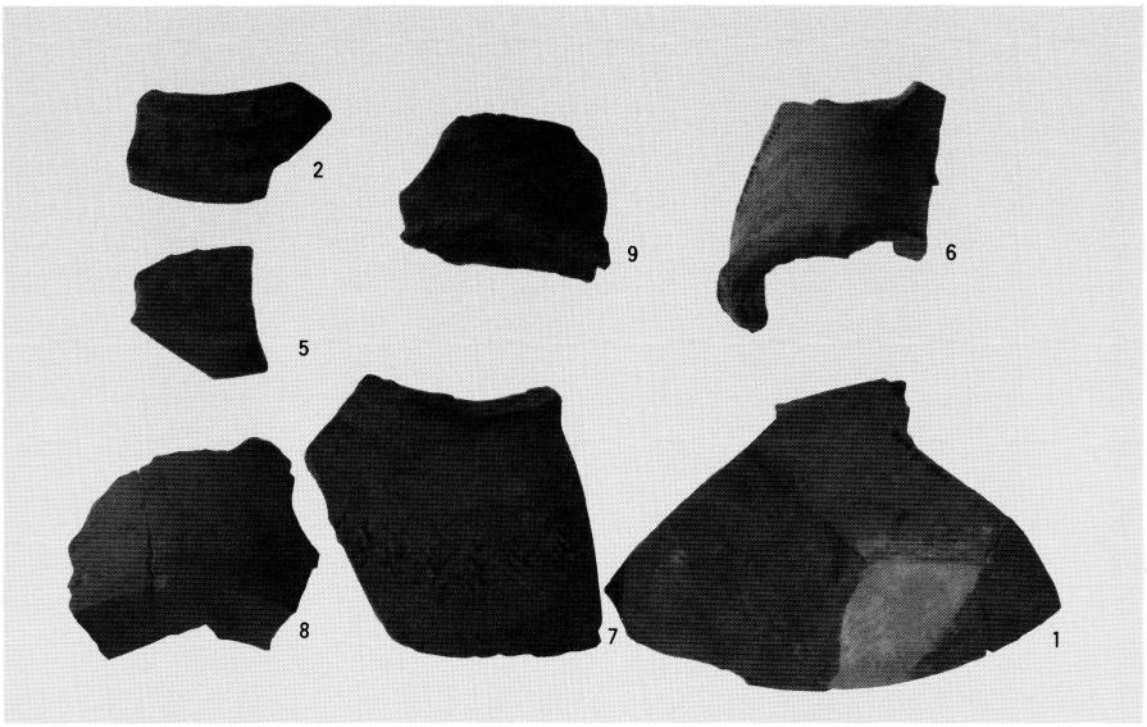


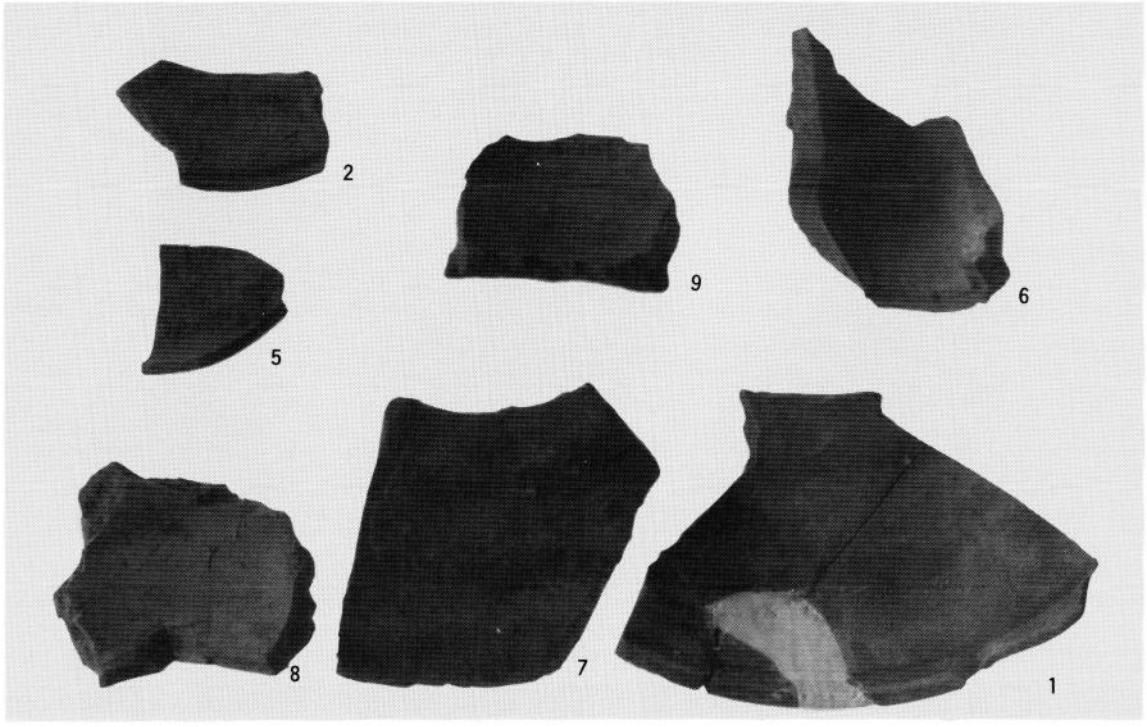
（1）八ッ重遺跡東区西側１号土壙



（2）八ッ重遺跡東区西側２号土壙



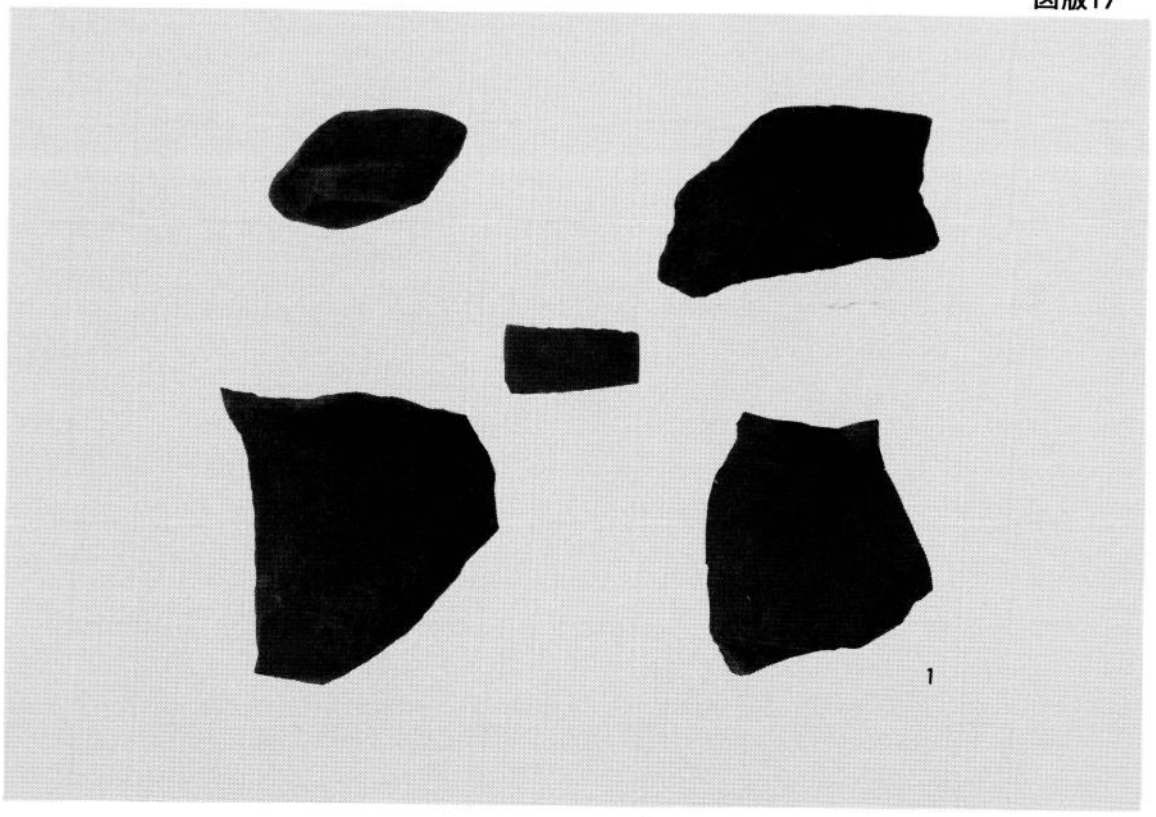


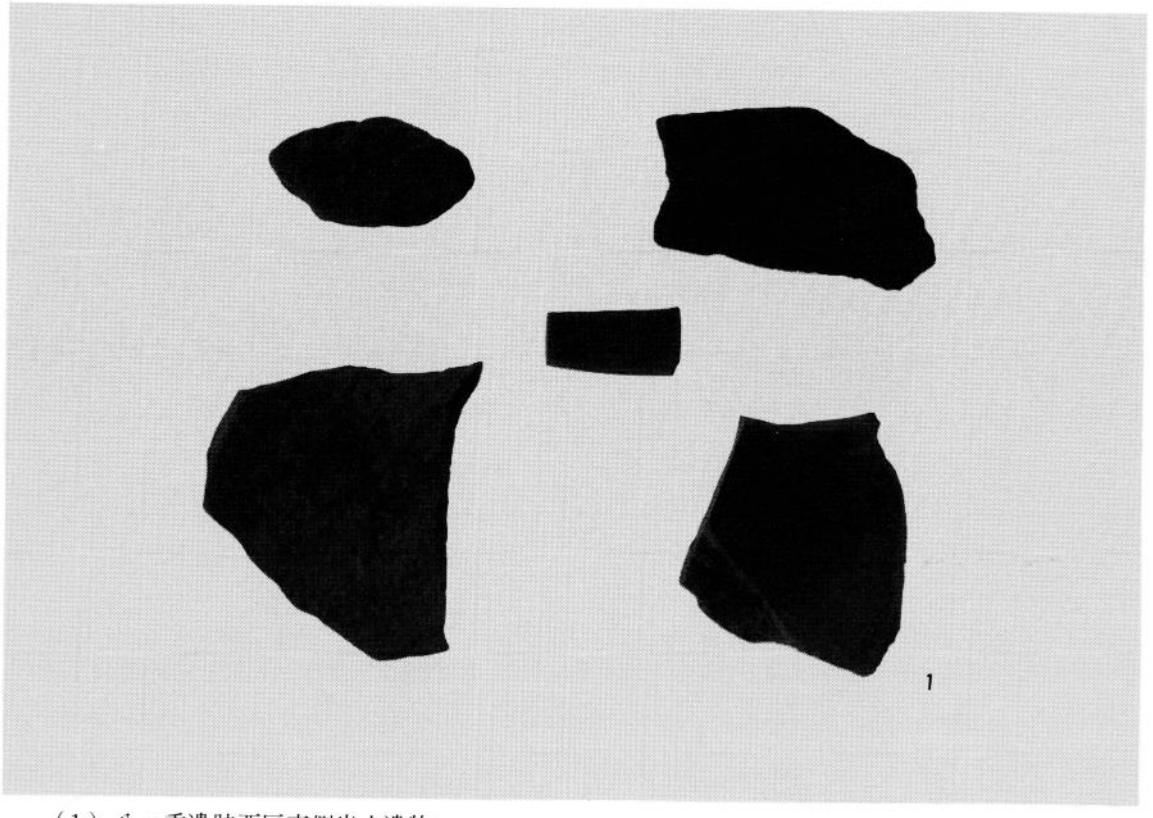


（1）八ッ重遺跡東区西側出土遺物

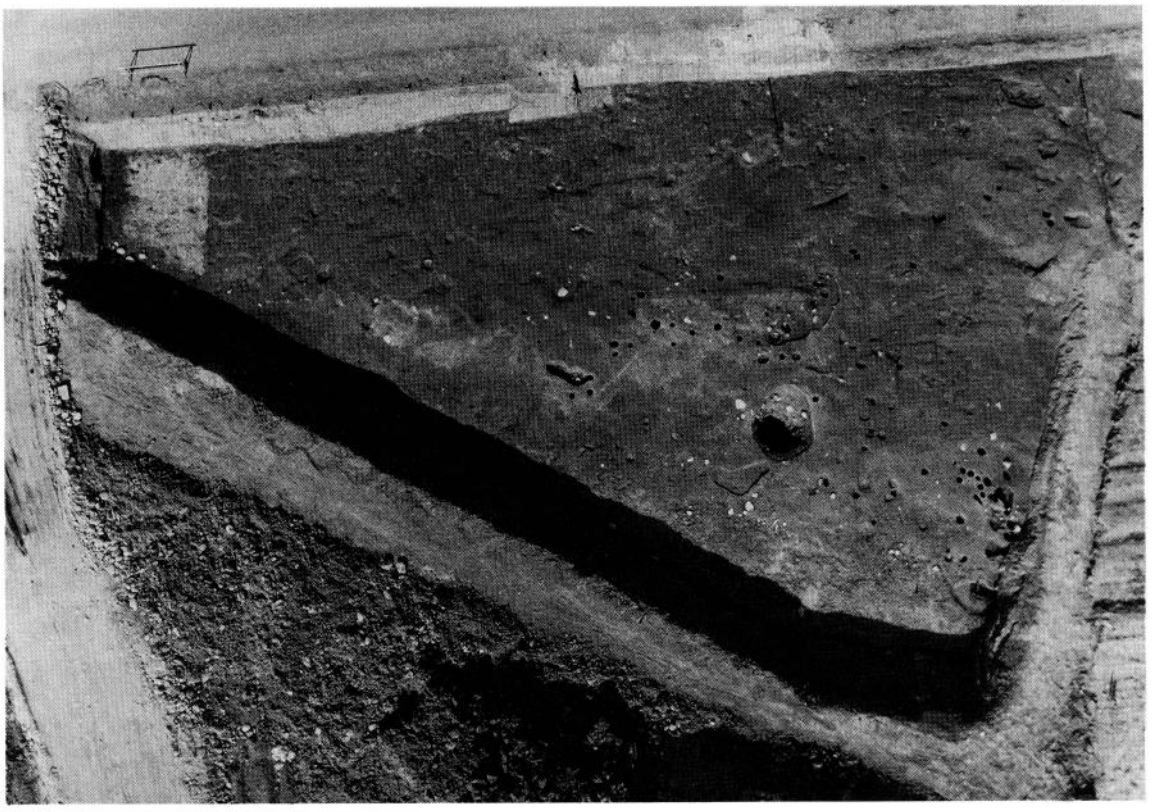
（1）八ッ重遺跡西区東側全景

（2）八ッ重遺跡西区東側全景（北より）



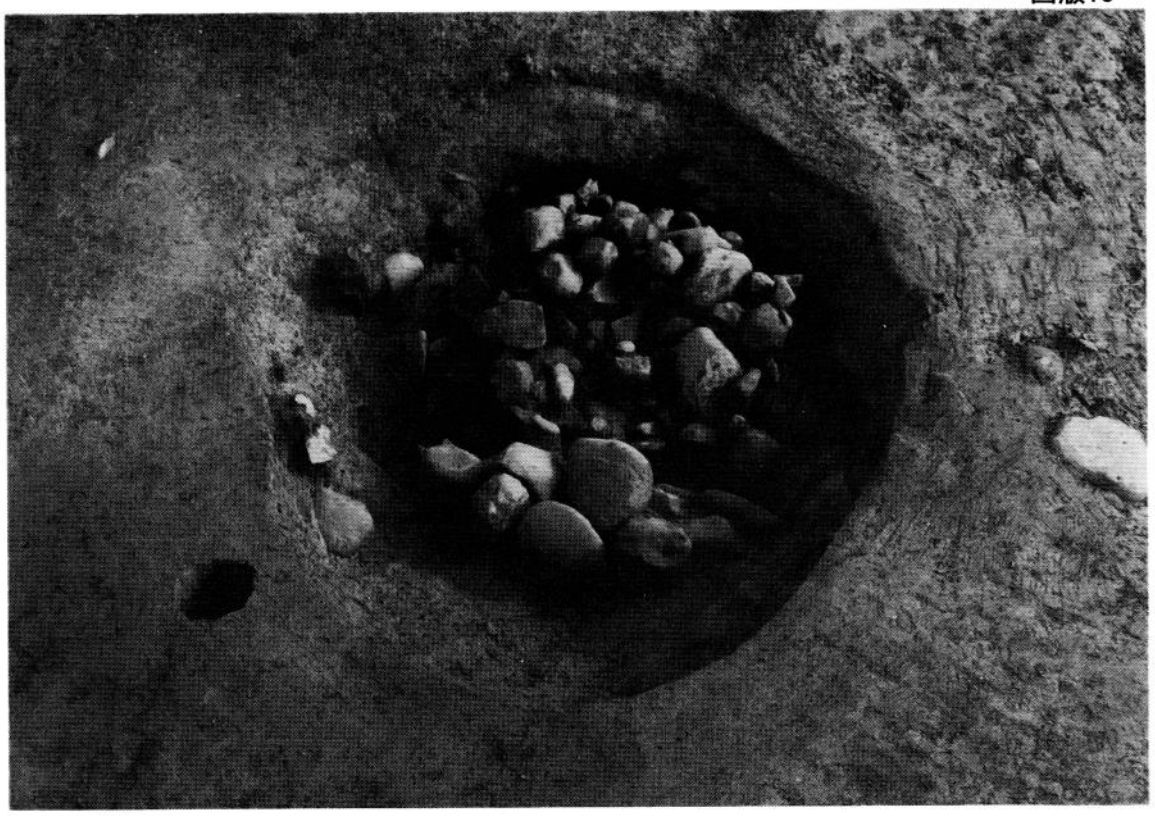


（1）八ッ重遺跡西区東側出土遺物



（1）八ッ重遺跡西区西側全景

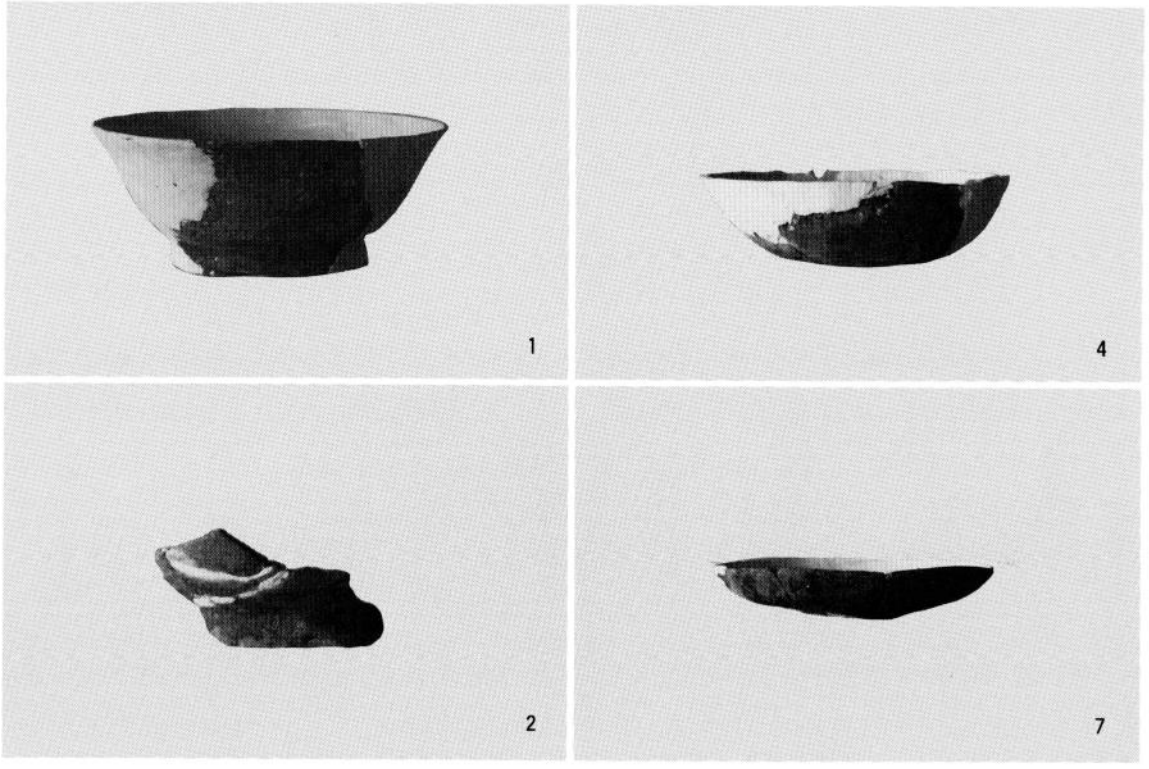
（2）八ッ重遺跡西区西側１号井戸周辺（東より）



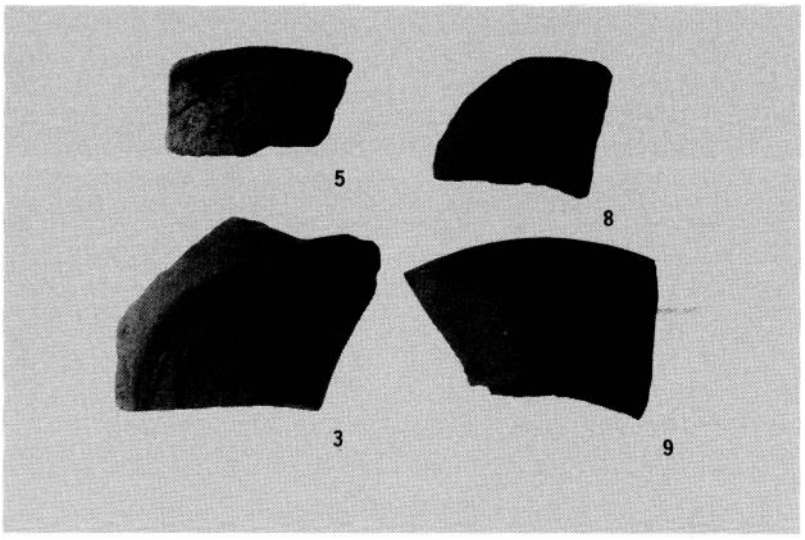
（1）八ッ重遺跡西区西側１号井戸内礫出土状況

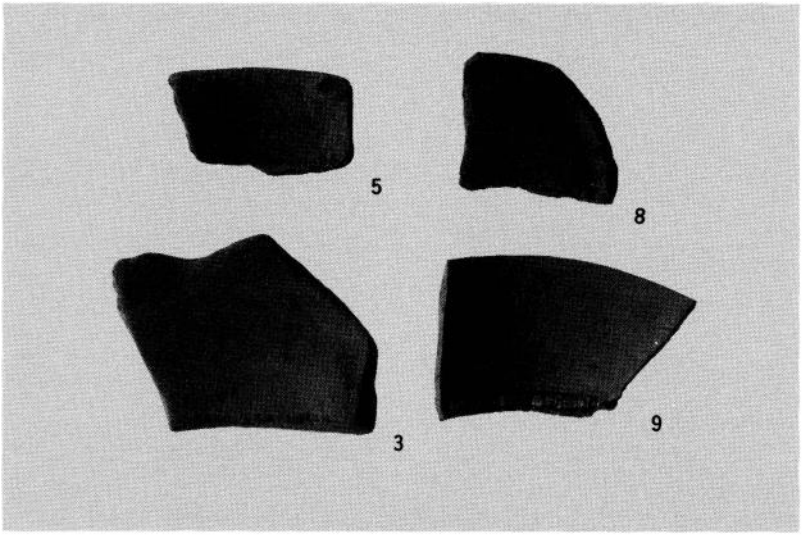
（2）八ッ重遺跡西区西側１号井戸内板材出土状況

（1）八ッ重遺跡西区西側１号井戸完掘状況

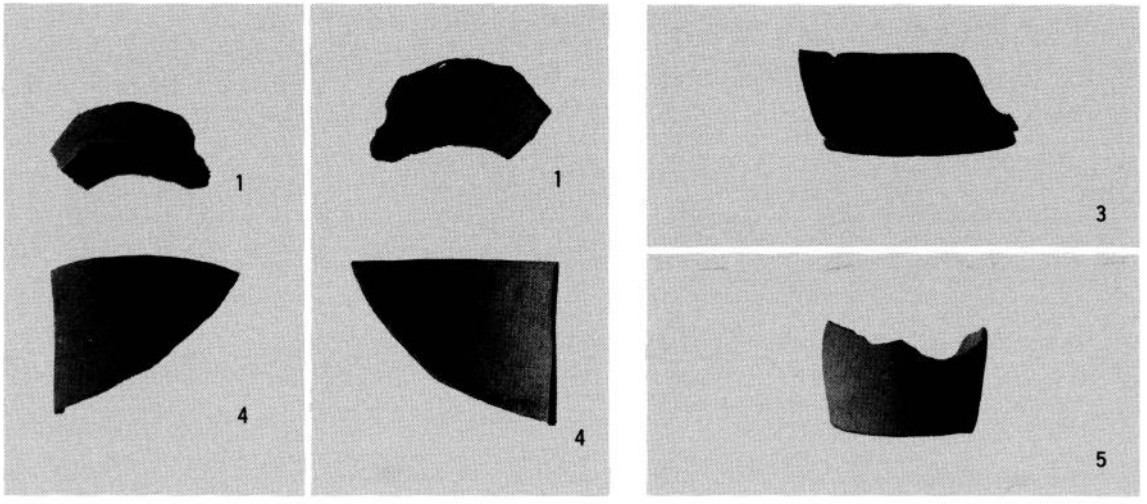


（2）八ッ重遺跡西区西側１号井戸出土遺物１





（1）八ッ重遺跡西区西側
1号井戸出土遺物2



（2）八ッ重遺跡西区西側出土遺物

椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告　—1—

平成元年3月31日

発　行　　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印　刷　　㈱文信堂印刷所
行橋市西宮市二丁目20－22

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 63	登録番号 7